

又舍利弗

おれが

けの

國を

樂しむ

黄金と

地に

時

はまゝに

花と

樹に

衆

を

お

え

け

を

他

長

を

王

國

を

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

吾國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

理研の榮養劑

Vitamin A + D



七七〇〇國際單位製品 四〇球…二圓 一〇〇球…五圓

他に婦人小供用製品あり

疲勞しやすい 風邪を引き易い
健康が優れぬと言ふ人に獎める

肝油とちがつて純粹製品なので、ビタミン含有量も消化吸収も優秀であり、効果も有力であります。全身の新陳代謝を活潑化し、鱗及びカルシウム代謝を良好にし、疾病特に呼吸器系疾患への抵抗力を強化します

理研化學研究所製品 帝國學士院受賞領

理研 ヴィタミン

總代理店 (株) 玉置商店 東京日本橋本町 大阪東區瓦町



◇ 淨 土 第五卷 第十二號 十一月號 目次 ◇

扉繪……………中 島 保

三來 夜話 鳩は巢を持たぬ……………大島徹水(六)

法然上人 靈場 勝尾寺に詣ず……………佐藤賢順(八)

病弱を悲しむ 婦人に答へて……………和田正系

(三)

信仰實話 念佛更生……………金田明進(四)

戦争と宗教家……………北林透馬(四)

信 仰 相 談……………中村 辨 康(五)

征 旅 の 回 想……………安田 秀 賢(五)

信仰 座談 魂 の 再 會……………淨き友の會(四)



野戰病院日記抄……………東 慈道（一六）

傷痍軍人
成功美談 闇の中の光……………本誌記者（一五）

阪根翁のことと 吉田絃二郎……………（一六）

戦線の會員より……………一瀬中尉・辻少尉（一四）

小説 猪の熊の神子……………葛西信二郎（一三）

歌 壇……………與謝野晶子選（一二）

俳 壇……………太田耳動子選（一〇）

日常勤行
式解説 「願」の宗教……………中村辨康（一〇）

鑽仰運動ニュース……………（四）

編輯 後記……………（三）

◇ 浄土……………十一月號 目次◇

金銀運動ニユーズ

信行道場の所長に

中村辨康師就任

別項記載の如く東京奥澤九品佛で行はれてゐる信行道場は浄土宗として劃期的なものであり、その成果は大いに期待されてゐるが本會理事長であり、本誌聖典講義で讀者とも馴染深い中村辨康師がその所長として就任、獻身的に青年佛徒の養成に當られてゐる。

「浄土宗讀本」完成近し

既報の「浄土宗讀本」刊行計畫は着々進行してゐるが、九月中旬に全部の原稿を纏める筈のところが前田聰瑞師のみ御都合によつて脱稿が十月一ぱいの見込みとなつたため、讀合せ整理その他で稍豫定よりも遅れるが大體今年中刊行の見透しは確實となつた。御期待を乞ふ。

兩政務次官 就任祝賀會

本宗浄光會の會員であり且つ本誌の執筆者でもある西岡竹次郎氏及び作田高太郎氏はこの度海軍及び文部の政務次官にそれぞれ就任されたので、去る八日明照會館樓上で本宗主催の祝賀を開いて時局下一層の御奮闘を御願ひした。

御獻金完納

本會への獻金者高瀬永蔵師は五百圓大島泰信師は三百圓それぞれ獻金を完納された。

尙維持會及び獻金御完納者芳名

陸海軍病院

慰問「浄土」

寄附者芳名（略敬稱）

壹圓 石川縣鹿島郡 池田直義

壹圓 青森三戸郡 中村智人

壹圓 滋賀縣甲賀郡 鷗飼實應

貳圓五拾錢 鎮路市米町 福山仙太郎

壹圓 佐賀市唐人町 鏡岡寺

壹圓五拾錢 樺太留多賀町 五十嵐傳藏

壹圓 千葉縣富浦町 遠藤金太郎

參圓 福島縣平市 九品寺

壹圓五拾錢 秋田縣龜田町 田口ふ津丞

壹圓貳拾錢 横濱市神奈川區 八城千代

五圓 北海道空知郡 阿彌陀寺

は追つて纏めて發表する筈です。

臺北支部主任田村智學師は上京の途次十月十六日日本會事務所に立寄られ本部の活動に就いて激勵された。

壹圓

高松市宮脇町 荒木はち子

壹圓

秋田縣北秋田郡 根本富貴子

貳圓

富山市南新町 法然寺

壹圓

麻布區三河臺 小島よし子

壹圓

青森教區下北組 多善寺

壹圓

福岡比良松 淨福寺

壹圓貳拾錢

高崎市本町 秋山まつ子

五圓

中野區氷川町 岡田金之助

六圓

熊本縣天草郡

良本秀枝

杉本モヨ 杉本コト

杉本タネ

佐々木チエノ 佐々木チハ 佐々木クヨノ 佐々木リマ 佐々木ワケノ 佐々木ヨネ 佐々木ツヤ 山本トメ

正誤前號發表の分の中福岡縣鞍手郡龍安寺とあるは龍專寺の誤につき訂正します。

淨土

十一月號

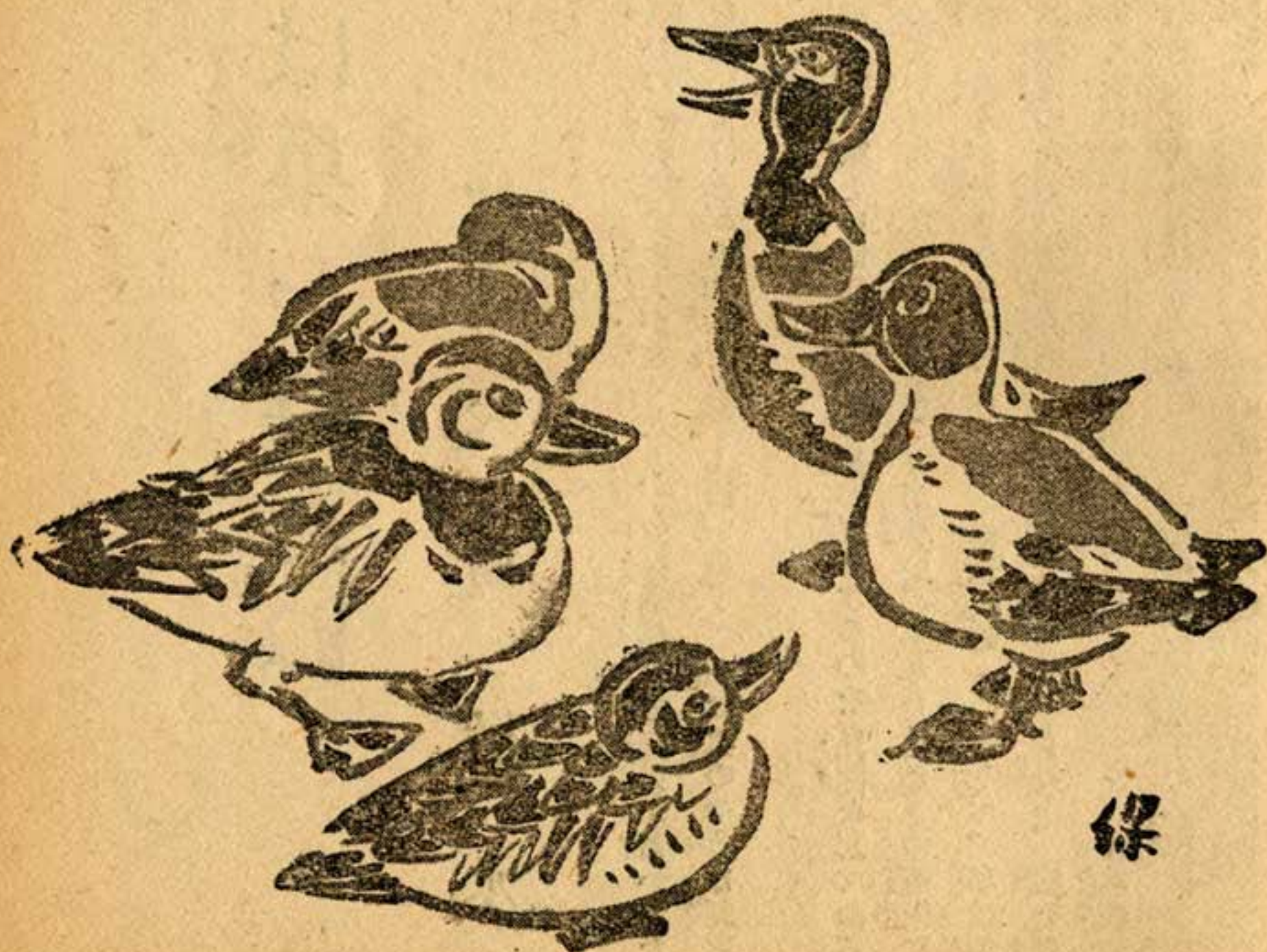
念佛には甚深の義と

云ふことなし

たゞ申すものはかならず

往生すとしるばかりなり

法然上人御法語



保



鳩は巢を持たぬ

増上寺法主
大僧正

大島徹水

先頃、知合ひの或舊家の主人が亡くなり、家督相續する長男が若かつたので相續者心得を説いてはと云ふ側近者のすゝめがあり、私は次のやうな話をして來た。

近頃私は處々で舊家といはれる立派な家が没落するのを見聞きしてゐる。殊に代がかはつていけなくなつたといふことが多い。かうしたことの原因にはそれぞれの場合の異りが示されるであらうが、根本的のものとして、私は相續者の家に對する間違つた考へ方が存在してゐるのではないかと思ふ。家を相續することは卑近な云ひ方をすれば親の財産を相續することである。親名義のものが一切が息子の名義に代へられる。そのときの相續者たる息子の心得に間違ひが生じはせぬであらうか。普通の場合、相續者は自身の自由をすぐ振舞ひたがる。親の遺したものは自分で氣儘に處置すればい

い。今日からはこの家一切が自分のものである。だから自分の勝手にならぬものは何もない、自分の意志を通すことに於て誰からの意見にも耳を藉さなくていい、——から云つたやり方だ。或富豪の相続人は先代の通夜の席上で、親族及び來會者一同に向つてこんなことを語つた——「私はこの家の相続人となつたいま、財産の番人を通すつもりはない。獨立自尊、これが私のモットーだ。私は私の意志で行動したい。」怖らく現代の青年の代辯者としての言葉であらう。そして浮薄と輕卒の言葉である以外の何ものでもない。

私は家を相続することは、その家の祖先のお守りをする事だと考へてゐる。祖先相続なのだ。祖先相続である以上、祖先の精神、信仰を身につけて片時も忘れることは出来ない。そこに相続者の勝手氣儘な考をゆるす餘地はないわけである。物質的な財産相続の根本に、信仰相続が嚴存する事實に思ひを致したならば、すべてひとりよがりな個人主義的考へなどは姿を消してしまふであらう。

京都の鳩居堂本舗にはその屋號の所以を家憲として頼山陽の書で記されてゐる。——初代がはじめて店の名を鳩居堂としたとき、人々は變な思ひをして訊ねたといふ、鳩はきまつたおのれの巢を持たぬ、他の巢に平氣で棲む、さうした轉變かぎりないものをなぜ大切な店の名に選んだか。それに對して初代は次のやうに答へたといふ、人はわがものであると思へば我儘になる、自分の勝手放題をやりたがる、しかしこの店も祖先の店を守るのだと思へば子孫は必ず粗末にしないであらう、鳩居としたのはその意味である。

こゝには興味深い教訓が語られてゐる。忝くも上に皇統無窮の皇室を頂くわが日本精神の至境は無我である。わが國の世界に矜る家族制度の美はしさも一に無我の教へに在る。それはとりもなほさず祖先崇拜の教へである。先祖まつりの教へである。それゆゑ、家の相続とは祖先のはたらしき、精神、信仰の相続であつて、物質の自己處分のための相続ではないことをしつかり身に締めねばならない。現下國民一致團結の要を切に體驗しつつある際、誰もが三省せねばならぬ事柄であらうと思ふ。

法然上人
靈場

勝尾寺に詣ず

佐藤賢順



九州大分への途中、寝臺車の中で明け方から腹痛を覚えて、どうにも我慢ができなくなつて、大阪で下車して、阪急沿線の蓋ヶ池の妹の家へ辿り着いて、そこで一日静養して一泊したのが、法然上人二十五霊場第五番、勝尾寺に詣る機縁となつた。誠に不思議な因縁である。

床の上に寝ながら、私は、法然上人が讃岐配流の赦免を受けて京洛へお歸りになる途中、四年間隠棲なさつた勝尾寺が、この邊から遠くない筈であると思つて、地圖などを出してみたり、近所の人に訊いてもらつたりした。箕面驛で降りて、大瀧まで二十二丁、それから一里近くの山道であるが、人力車があるといふことがわかつた。身體には自身はない、夕方漸くお粥を食べただけで、まだ時々鈍い腹痛を感じて、重苦しい氣持であるが、どうかして明日は勝尾寺へお参りしたいといふ氣になつてゐた。

翌朝は通り時雨であらうか、時々雨がバラ／＼と來た。ラヂオの天氣豫報を聴いてゐると、「午前中は多少時雨氣味ですが、午後には幾分晴れ間も見えるでせう」といふその多少と幾分に期待をかけて、お腹工合を氣にしながら、妹を介抱役にして、思ひ切つて出かけた。

ところが、箕面驛を降りて訊いてみると、人力車は大瀧までしか行かない、それから先は、人力車なら後押しをもう一人つけるそれでも所々は降りて歩いてもらはなければならぬ、御婦人でしたら草鞋か結へ草履でなければ駄目だ、何しろ大瀧から三十三丁の山道ですから、と車夫が言ふので、またこゝで一思索した。さう囁かれても、行けるところまで行かうと、もう一度氣を取り直して、兎も角も大瀧まで車に乗つた。幽邃な箕面川の清流に沿つて、役の行者の古蹟や辨才天を左に



二階堂全景

見て、いみちの林の間を登る。この邊一帶はいはいもみぢといふ葉の小さいいみちの密林である。溪流を挟んで紅に燃える十一月初旬の紅葉の頃の美しさが勞靡としてくる。大瀧で車夫と別れて

勝尾寺への山道を登り始めたが、車夫に囁かれたやうな峻峭な所は一向にない。所々に急坂があるが、それとても大した苦勞ではな

川に沿ふて、いみちや柏の静かな樹林の間を、登るのは寧ろ快適である。

「勝尾寺×丁」といふ花岡岩の道しるべが一丁ごとに置かれてゐるのを、五丁十丁、二十丁三十丁と、苦もなく數へて、三十三丁目は勝尾寺の樓門である。風雨に曝されて色褪せた丹塗の樓門がどつしりと聳えてゐる。

勝尾寺をこの邊の人は「かちをうじ」と稱へてゐる。法然上人靈場といふよりは、寧ろ西國三十三ヶ所の札所として名高く、茨木の總持寺が第二十二番、こゝが二十三番、こゝの觀音様にお参りをして阪急寶塚線の中山寺へ行くのが順路であるさうだ。中山寺は二十四番である。

樓門をはいると急に眺望が開けて。樹木鬱蒼と茂る丘陵の中ほどに、書院、多寶塔、本堂、二階堂、荒神堂などの屋根が見えかくれする。この邊一帶も夥しいいはいもみぢで、もう色づいてゐる葉もかなり見受ける。紅葉の頃は、きつと友禪模様のやうに美しいであらうと、妹は女らしい見立てをする。

石段を登つて書院を右に見て、左へ城壁のやうに聳える石垣の間を更に登ると本堂である。本堂は寶龜八年の造営、正面には歸化人妙觀が僧俗童子十八人を引具して造つたといふ十一面觀音が安置してある。西國第二十三番の御詠歌は

おもくともつみにはのりのかちをでらはとけをたのむみこ

そやすけれ

である。

更にこの本堂と納經所の間の石段を暫く登ると、法然上人の御遺跡二階堂である。遙かに柴の戸山に對して一山のうちでは最も眺望のよい場所である。刺を通じると七十餘りの老僧の所へ通された。老僧は律僧らしく、黄色の袈裟のそれも色褪せて汚れて可成り損んでゐるのを身に纏ふて、立居も不自由らしく、火鉢の前に坐つて、粗朶をくべて、土鍋で粥を煮てゐるところであつた。

『御遠方をようこそ御参りなされた』

と喜んで、土鍋を下して土瓶をかけて、湯を沸かし茶をいれて勧めてくれた。

勝尾寺は明治以後は東京目白僧園の釋雲律師の眞言律系統に屬してゐるから、この老僧も本坊の和上もいづれもその系統である。老僧はこの山に三十年住んでゐるといふ。私は法然上人傳に記されてゐる上人隱棲當時の記事を基にして、色々と尋ねてみた。

老僧は糸を繰るやうに、あとからあとからと低い小さい聲で話を續けて途切れる間がなく、話題から話題へ飛び石を飛ぶやうに移つていつて纏めるのに骨が折れるが、あらまは次のやうである。

神龜四年三月といふから聖武天皇の御時であるが、善仲、善算といふ二人の者がこゝに來て、四十餘年間觀行を續けてゐると、天平神護元年のこと、裏山の洞穴に一人の修行者を見つけた。二

羽の鳥が毎日運んでくれる木の實を食べて修行をしてゐたが、これが光仁帝の皇子であつた。皇子は二人について受戒染衣して開成と改め一層梵行を勵んだ。勝尾寺草創當時の物語はかうして始まる。

時代はずつと下つて貞觀八年(といふと千八十年も前である)、證如といふ聖が嚴密の修觀を多年續けてゐたが、或る夜、鼠を控いて告げる者がある。

「我は播州加古の沙彌教信なり、口今極樂に往生するなり、上人は明年の今月今夜に御迎ひあるべし。この事を告げん爲に我聖衆と共に來たれるなり」

これは元享釋書によると證如が無言の行を續けてゐるのを、教信が極樂往生にはそんな行よりも念佛に及ぶものがないと、念佛を勧め、それから證如も難行を止めて念佛を勵んだので、その功德によつて翌年のその日、正しく往生したと記してゐる。法然上人(勅修御傳)の記述も少しそのことに觸れてゐる。

私は二階堂の老僧に、證如はなぜ念佛を稱へたか、と訊いてみた。すると老僧は「密教を知らなかつたんだらう」と簡單に答へてゐた。この證如上人往生の地が正しく、法然上人御託居の地に當るのださうである。

その後、行順上人の時、清和天皇より勝尾寺の勅號を賜つた話があるが(それまでは彌勒寺と稱へてゐた)、總て今は省略す



勝尾寺全景

る。

南都北嶺の舊佛教に對して、專修念佛の新宗の宣布は、舊佛教系を異常に刺戟して、迫害と讒訴とは手を代へ品を代へて、法然上人の身邊に迫つた。遂に御所の女房が二人出家した事件を口火に、關白藤原兼實公の配慮も功なく、上人は四國へ流謫せられることになつて、承元元年二月二十八日に配流の宣命が下つて、

三月廿六日には讃岐に着いた。然し一方ならぬ兼實公の骨折りで其の年の十二月八日には勅免があつて、歸れることになつたが、勅免の宣旨には「但しよろしく畿の内に居住して洛中に往還することなかるべし」とあつて、近畿に住むことはよいが、まだ京都へはいつてはいけぬといふ御沙汰であつた。その間詔居せられた寺が、勝尾

寺なのである。

「あのずつと西の谷に草庵を結んでそこに住んで居られたが、後にこゝへお移りになつたのです」と老僧は西の方を指す。

上人がこゝに隠棲せられた頃、恒例の念佛會があつたが、僧衆の法服が餘りに汚いので弟子法蓮房を京都へ遣して、京都の信徒から法服十五具を施入させたところ、寺僧達は喜んで臨時に七日の念佛會を修したといふ記事が勅修御傳に載つてゐる。また、上人所持の一切經論を施入したとも書いてあつて「住侶隨喜悅豫して老若七十餘人、花を散らし香を炊き幡を擡げてさし迎え奉る」とその時の喜びを記してゐる。

「その一切經は今ありますか」

「本坊に箱だけ残つてゐるかも知れない」

といふ頼りないことであつた。

勝尾寺の寺傳によると、法然上人が勝尾寺へ來られたのは讃岐配流中の或る夜、善導大師が夢に現れて、勝尾寺へ行けよ、我彼の地に於いて汝に末後の附法を印可すべし、と告げたためであるといふ。そして、こゝ二階堂で建暦元年正月廿一日の夜、また夢に現れて、布薩戒を授けて、「この戒は生死出離の大證、一大事の因縁なり、自今以後余が相承の戒儀を以て、有心の道俗に授くべし」と言はれて、大成を授けた證據に疑ひを入れるものがあるといけなから、壁板に影を残さうとて、御影をとゞめられ

た。法然上人も亦、同じく壁板に御影を残したまふたといふ。

老僧は立つて蠟燭に火を點して一禮して、本尊の左右の扉を開いてくれた。成るほど影とも木目とも見える姿が板の上に印せられてゐる。妹が訝し氣な顔でその板を見つめてゐるので、私は「善導といふのは支那の唐の時代の人で、思想、信仰の上で法然上人は全くこの人に依つてゐる。この二人は時代から言へば五百年も隔つてゐるが、この傳統が如何に重大であるかを教へる爲に昔の人はかうした色々の説話を考案したのだよ」と語つた。

建暦元年には花洛の往還が許されて、四年間住みなれたこの寺を後にして、十一月二十日東山大谷の禪房へ歸られた。御年七十九歳であつた。御傳の記者は其の時の有様を「一山徳を慕ひ、滿寺名残を惜みて、萬仞の霞よりいで、九重の雲にぞ送りたてまつる」と書いてゐる。

一行誠上人がなア、あそこの庵室に四日ほど泊られたことがあつた。あそこで毎日念佛を稱へてをられた。

さう言つてすぐ近くの専修庵といふ草庵へ案内してくれた。四疊半ほどの草庵が今残つてゐるだけであるが、右は柴の戸山に對し左は平野を俯瞰して、眺望の良い所である。中程に圍爐裏が切つてあつて、

『かりして、こゝにちやんと坐つて、行誠さんは念佛を唱へてをられた』

私は明治の頃その高德一世に知られた行誠上人が宗祖の芳躅を慕つて、こゝに靜坐し唱念した心持に襟を正した。庵室の丸木柱を削つて、

今日もなほ昔に似たる白雲を

この柴の戸にしばしこそみれ

と書いた、その特徴のあの筆跡は、今もなほ墨色鮮かに残つてゐるのである。この歌は、言ふまでもなく、法然上人がこゝで、

柴の戸にあけくれかゝる白雲を

いつ 紫の雲とみなさん

と詠ぜられたのに寄せたものである。

私はこゝに暫く徘徊して承元、建暦の昔を偲び、行誠大徳の心境を沈思したが、暮れるに早い秋の日の、黄昏の迫らぬうちに、急いで山を下つた。

夕方、住友に勤めてゐる主人が歸つてくると、食卓を圍んで、『どうやら命に別狀なく行つてこられたよ。肝腎の介抱役の方がへたばつてしまつた』

と笑つて、私だけはお粥を少々食べて、その夜の特急で九州へ向つた。

(十四・十・六、參拜)



病弱を悲しむ婦人に答へて

醫學博士 和田 正 系

× ×

御郷里からのお手紙たしかに拜見致しました。御歸省のお便りを頂いたのは、つい二三日前と思つてゐましたのに、餘りに速い御引上げの御通知で驚いて了ひました。あの手紙をお出しになつた日に出發されるとのことでしたから、無論既に東京へお歸りになつたことと思ひます。それで、この御返事も東京のお宅へ出すことにしました。

十枚の便箋に細かい字でぎつしり書いてありますので一通り讀むのにも中々時間がかかりました。平素の御病弱の様子は無無論今迄も大凡は私に判つてゐたのですが、あの詳細な御容態の書振りで一層はつきり致しました。そして私に、如何にしてこの病弱な身體を健康にすべきかといふ御相談です。貴女は、それに就いて私にいろいろと質問しておいでになるあの質問は

中々根本的で、あれに對する明快な回答を書くだけで、私は貴女の希望を大部分満足させることが出来るかも知れません。たとへば、何故私はこのやうな病身になつたのでせうかといふ様な質問です。私は今實は、これらの一つ一つの御質問に對し、あなたが良く納得出来るやうな、詳細な御返事を書いてゐる餘裕がありません。それは何れ折を見て後返事するとして、今日は御手紙を讀んで私の氣のついた、最も根本的な、そして然も又、現在當面の問題に就て、少し申上げて見ませう。

あなたの、御病身についての悲嘆は、あのお手紙に充ち溢れて居るばかりでなく、讀む私の心をも暗くするのです。私は先づ第一に、あなたのこの心持について申し上げねばなりません。あなたは毎日毎日病弱な自分を憂ひ悲しんで、心の休む暇も無いとおつしやる。醫者の藥や又いろいろの賣藥を片端から



飲んででも一向効目が無い。又、あらゆる健康法もやつて見たが効がない。結局醫者のすゝめで、御郷里に轉地されましたが、寂しくて不安で居たゝまれず、遂に豫定を變更して一週間で東京へ歸られたとか。私はあなたの健康法の第一として、先づ何よりも、かういふ不安な、あなたの心から問題にしなければならぬのです。

あなたは健康を切望されるならば、先づ何よりも心の自覺を持たねばなりません。自覺を持たぬ限り、現在のあなたは如何に藥を飲んだとて、如何に良い強壯法を行はうとて、何の効も無いことを私は斷言して憚りません。私は茲で大いに苦言を呈さねばならぬのです。あなたは餘りにあせつてゐます。あなたは餘りに心の平靜を缺いてゐます。迷ひと悶えとの爲めに正しい判斷をすら失つて居るのです。

まあ考へて御覽なさい。あなたも御手紙に書かれた通り、あなたの病弱は既に數年以來、否、本當を云へばその原因は既に生れつきにあると云つても良い位ではありませんか。これが風を引いたとか、腹下しをしたとかといふ程度の急性病であれ



ば、兎に角、由來する所の長い、體質的な、あなたの病弱が十日や二十日の服藥や冷水摩擦で治る筈はありません。それが分らねばならぬ筈であるのに、あなたはあつちの藥を一週間、こつちの藥を二週間と飲み散して、効力が無いからと云つて悲觀して居られる。餘りに認識不足の無自覺です。今回の轉地だつてさうです。御郷里の靜かな山寺、それも御親戚であり、何もかも靜養に理想的であると云ふので、あれ程喜び勇んで歸郷された筈でしたのに、僅か一週間で、寂しくてたまらぬ、不安で一刻も落ついて居られない、東京が戀しくてならぬい。——そんな譯で始めは一年といふ計畫を僅か一週間で變更して歸京しては了れた、何といふ事でせう。あまりに薄志弱行、なさけ無いではありませんか。さういふ態度を改めない限りあなたの切望

する健康などは絶對に來ません。あなたには健康といふことが少しも判つてゐません。あなたは藥を飲んだり、轉地したりすれば、それで健康といふものが、向ふから直ぐにもやつて來て呉れるやうに思つてゐます。健康といふものを、何か身體と別のものゝ様に考へてゐます。健康といふものは何處までも、



その人の肉體の力であり、心の働きであつて、自分が創造するより他に仕方ないことを、あなたはよくよく覺らねばなりません。

それから、あなたは——いやこれはあなた一人に限りませんが——どうも生活上のいろいろの態度が、自分以外の、他のものに餘りに支配され過ぎてゐます。餘りに自己といふものがありませぬ。これが宗教上の他力といふ意味なら立派ですが、さうでは無くて要するに無定見、無自覺、無智といふ甚だ面白からぬ原因によるのです。その爲め生活には迷ひが多く煩悶が多く、病弱の身を一層蝕むことになります。たとへば、あなたは家に居れば近所の人達に肺病だと思はれはしまいかと心配してゐます。實につまらぬ心配です。かういふことは私もよく患者から聞くのですが、何といふ下らぬことに頭を使ふのかと情け無くなります。肺病で無ければ、人が肺病と思つたとて良いではありませんか。又實際肺病であるなら肺病と思はれたつて良いではありませんか。人が何と思はうとも氣にする必要は無いのです。あなたは肺病と假りにも噂されたら、就職口が無くなるとか、嫁入り口の邪魔にでもなると心配して居ます。このやうな心配が所謂觀念苦と云つて、全く何の役にも立たぬ。心の中に自ら造る、最も愚かな苦悶です。現在そのやうな就職口があり、嫁入り口が有るのなら、格別、今は當ても無い心配では

ありませんか。萬一就職口が無ければ就職しなければ良いのです。嫁入り口が無ければ、お嫁になど行かなければ宜しいのです。そんなことは心配せずとも、すべて自然がうまくやつて呉れます。といふと甚だ漠然として夢のやうな話と思はれませうが、これ位確かな事はありません。あなたは現在の、毎日の生活を正しくやつて居れば、あとは自然が適當に解決して呉れますから決して心配は要らぬのです。あなたが、たとへ病身であつて、人が何と噂をしやうとも、さうなるべき縁があれば嫁でも嫁ぐ口は來ますし、如何に健康にならうとも、縁が來なければ一生獨身で居らねばならぬかも知れません。あなたは今は、そんな心配は少しもしなくて良いのです。たゞ毎日楽しく暮すことを心懸ければ宜しいのです。人があゝ云ふから、かう云ふから、又、人はかう爲るから、あゝ爲るから——たゞそれだけから割出した生活は餘りに情け無いではありませんか。それでは一體誰れの生命、生活なのです。あなたは、もう少し大きな心をもつて、自分自身の生活をしなければ駄目です。

以前かういふ事がありましたね。あなたは風を引いて四十度近くの熱が出ました。藥を飲んでも直ぐ熱が下らぬ、肺炎にでもなりはしないか、死にはしないかと、一日の中に何度も電話で問ひ合はしたり、往診を頼んだりしました。肺炎などの徴候は全然無いし、唯下熱迄の時間だけの問題であるから心配は無



いと、私はよく／＼お話したのですが、それでも、あなたは死にはしないかと度々私に聴かれました。死の問題は簡單には書けませんし、未熟な私などの云ふべき事ではありませんが、然し人間、いかに死にたくとも、死ぬ因縁が来なければ死にませんし、又いかに死ぬのが嫌やでも、時期が来ればこの世をお暇せねばなりません。ですから、實は死のことは心配しても仕方が無いのです。勿論病氣の時など、出来る限り治療するのは當然ですが、それ以上は最早人間の及ぶ所ではありません。一切を大自然に任せして、悠々たる氣持で居ることこそ最も賢明なのです。

あなたは、そのくよく／＼した、狭い、心の殻を据えて、大きな廣い大自然を眺めて下さい。私達の身には病氣を回復し健康を増進する大自然の力が具つて居ます。これが私達の生命のもとです。あなたが、死にはしないかと病氣の度毎に心配しながらも、今日まで生きて來られたのはこの力に由るのではありませんか。私達は正しい智慧を以て、この自然から興へられた生命力を信じ、これを強く育て、行くより他ありません。あなたは餘りにも狭い自己に捉はれて、こ

心配せずともよい事を

自分からこし

らへて……



の大きな自然の力を見ることが出来ませんでした。あなたのお手紙にある、くよく／＼した煩悶と焦悶とは、ひと度、眼をあけて大自然を眺める時、朝霧の如く吹き拂はれねばならぬのです。私から云へば、あなたは心配せずとも良いことを、自分から心配をこしらへて煩悶して居られるのです。實につまらぬことではありませんか。あなたの目下の急務は、先づ何よりもその、いらいらした心を平靜にし、神経を落つけることです。それだけで、あなたの健康は急に回復すると思ひます。少くも、病弱體が無くなれば、苦悶は大半消失する筈です。

あなたの心の問題については、申し上げることが實に澤山有りますが、今一々書いて居られませんか、以上の御返事から想像して下さい。然し最後に大切な毎日の生活について御注意することがあります。私は心を平靜にする事が、急務と申しましたが、それには何よりも、充分の休養と營養とが必要です。あなたの神も肉體も餘りにつまらぬことで疲れ過ぎてゐます。この疲勞を治すには充分なる休養と營養とが第一に必要です。あなたは友達に負けないやうに勉強せねばならぬと考へてゐ



ます。然し今はそのやうなつまらぬ虚榮心はきれいに捨てて了ふのです。本など今は讀む必要がありません。勉強して神經衰弱になるなどは實に馬鹿らしいことです。頭腦の休養の爲めに映畫や芝居を観るといふこともいけません。却つて神經を刺戟するばかりです。先づ何よりも充分の睡眠です、疲れたら唯身體を横へて居るだけでもよいのです。つまらぬ本など讀むことは禁物です。

あなたが田舎のお寺から歸られたのは如何にも惜しいと思ひます。それはお寺といふものは心を靜かにする爲めに、又正しい智慧を磨く爲めに何より良い場所と思ふからです。然し東京にも、あなたは坊さんの御親戚が澤山お有りになる、是非さういふ方に心の指導をして貰ひなさい。私としてはあなたに念佛と讀經とを是非おすゝめしたいと思ひます。念佛や讀經を健康法に使ふといふのは、そもそも間違つた、冒瀆な事ではありますが、然し今はこの問題に深く觸れる必要はありません。坐禪も良いと思ひますが、然し私は先づ一般の人にはお念佛の方をすゝめます。あの一心に聲を出すことが何にも増して良いことなのです。讀經もさうです。阿彌陀經でも觀音經でも一心不乱にあげて御覽なさい。あなたの、くしゃくしゃした、紙屑籠のやうな頭の中は洗はれたやうに、さつぱりするでせう。何れにせよ、あなたのやうな人には、大きな聲を出すことが良

いのです。唱歌でも、朗讀でも良い。然しそのやうなものに比べて、念佛とか讀經とかいふものは、流石に何千年何百年の傳統と信仰とのエキスですから、その深み、その有難味は同日の談でありません。人を眞劍にさせる偉大な力をもつてゐます。あなたは日課として少くも朝夕お念佛と讀經とを讀み、又思ひついた時いつでも佛前に端坐して讀經することを仕事となさい。それ位の眞劍味が無くては到底健康になることは出来ないのです。

へたな薬は飲まぬ方が宜しい。殊に賣藥を飲み散すことは絶対にいけません。

それよりも今のあなたは、三度の食事を美味しく、どつさり食べることに全力を注ぐのです。これにもいろいろの工夫と智慧とが要ります。まあよく考へて後置なさい。

私は云ひたいことが、山ほど有りますが餘り長くなりますから又後便にしませう。

兎に角あなたは、その心を靜め、榮養と休養とに注意すれば必ず健康になれます。然しその實行には充分の自覺と忍耐とを必要とします。

それではその後の御様子をもたお知らせ下さい。私も亦御返事を差上げませう。では御機嫌よろしく、左様なら——。

野戰病院日記抄

東 慈 道



はしがき

三月上旬に警備交替で部隊の大移動が行はれたが、三月六日のS町からZ町迄の僅か五里餘りの最後の行軍が苦るしくてならなかつた。私は歩兵砲中隊の一員だったので、愛馬

Hをひきながら行軍してゐたが、身體が熱つぽくてだるく、馬にひきずられるやうにしてやつとZ町に到着した。

すぐにも横になつてやすみたいのを怵へに怵へて、馬の手入れをしたり鞍の埃りをはら

つたり、砲や彈藥箱を整頓したり、到着後の慌しい雰囲気の中をこまめに動き廻つたが、夕飯の仕度にとりかかつた頃は、さすがに動くのが億劫になつた。薪をとりに行つたり、米を洗ひに行くやうな、身體を動かす仕事はみんな戦友に譲つて、私は土間に坐りこんだまゝ、鍋の調理をはじめた。

やがて煉瓦がゴロゴロころがつてゐる戦火に荒らされた前庭で楽しい夕餉がひろげられた。薄い雲間からもれてくる淡い月の光が、砲弾で壊された廢墟に靜かに流れてゐる。煉瓦の破片にたてられてゐる蠟燭の焰がゆらめく度に、戦友達の顔が優しく見えたり恐ろしく見えたりする。自分の時間になつてはつとしたせいか、戦友達の顔に疲労の翳が濃くなつたやうだ。

私はうまさうに飯盒にかじりついてゐる戦友達をぼんやり眺めてゐたが、もう我慢しきれなくなつた。手足の先から苦しさが波のやうに湧き起つてきて、心臓がその波にまきこまれるやうだ。戦友にあとをたのんで、半壊

の汚ない民家の假宿舎にころげこんだ。體の上に軍服のまゝだ。身體は疲れきつてゐるが、息苦ろしくなかく寝つかれない。神經だけが妙にさへてくる。右に左に輾轉する。

暫くして戰友達がもぐりこんで來た。五人つりの蚊張に九人も這入りこんだので、身動きも出來なくなつた。それに三月初旬とはいへ南支は内地の五月頃の暑さだ。汗ばんだ戰友の身體が兩側からビツタリくつついて、その體温がぢかに傳つてくる。汗と埃りと馬とのむん／＼する臭氣が蚊張一ぱいに充満する。寝苦ろしさはつのるばかりだ。熱もかなりあるらしい。マラリヤにかゝつたのかもしれない。

壊れた屋根から燻し銀のにぶい月の光が流れこんで來た。郷愁が苦しみに喘いでゐる肉體の細胞にはのかに生じてきた。窮屈に寢返りをうつたびに、それが次第に大きくなつてくる。佗しさの中にめいりこみさうだ。苦惱は強まるばかりだ。とう／＼まんじりともしない夜が明けてしまつた。首をしめつけら

れるやうな苦ろしい、しかもやるせないものうい夜だつた。

戰友達には忙しい一日が訪れた。新しい醫備地に於けるいろ／＼の仕事が——宿舎を作つたり、厩をこしらへたり、風呂場を設けたり、寸刻の暇もない一日が始まつた。然し私はとう／＼起き上れなかつた。

かうして私の長い病床生活が始まつたのだ。

三月二十三日

愈々入院することになつた。

發病して既に十七日が過ぎ去つてゐる。發病の翌日、移動直後の匆々しい中ではあつたが、念の爲にとり敢へず近くの療養所で診てもらつた。「マラリヤ」らしいとの診断だつたので、それなら四五日も寝てゐたら癒るだらうと、戰友に慰められて靜養してゐたが、なか／＼捗々しくない。

K 准尉殿は寢てゐるまゝでいゝから中隊本部へ移つて來いと、頻りにすゝめられる。(移動後私は中隊本部付を命ぜられて指揮班にま

わされた) 私としては元氣になつて移りたいのだが、醫はもうこの小隊にないので、小隊長殿以下みんなの温い情に何時までもほだされてゐるわけにもゆかない。いろ／＼親切にしてくれた思出多い懐かしい小隊に別れをつけて七日目に中隊本部に移つた。

緊張してゐたせいか二三日の間は非常に元氣だつた。無理をしないで寢てゐる、とみんながやさしく言つてくれるのをおしきつて、私の仕事に残してあつた兵隊から募集した標語の選をした。准尉殿が

「君が來てくれたのでこんな仕事はほんとに助かるよ。だが、顔色がまだ悪いから寢てゐた方がいゝね」と言つてくれた言葉が嬉しくてならなかつた

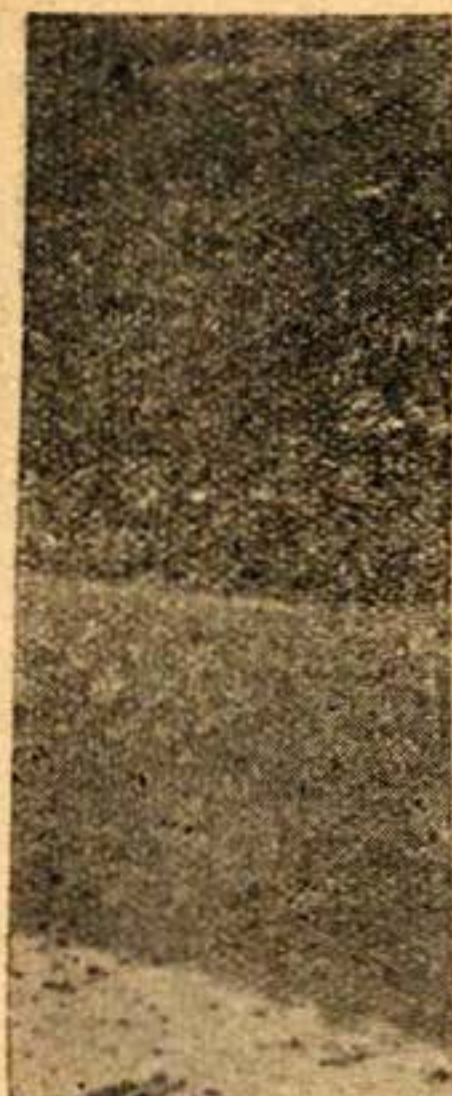
夕方、病勢は再び悪化した。熱は四十度を突破した。

隊付の衛生兵が驚いて水で冷やしたり、粥をたいたりして看病してくれたが、熱はなかなかひかない。腸もスツカリ悪くなつて猛烈な下痢を始めた。移つて來て早々に寢こん

でしまつて、みんなに迷惑をかけるのがつらくてならない。みんなは、氣がねせずにくつくり養生しろ、と温くいたはつてくれるがその親切がかへつてすまない氣持をつのらせる。移動直後のことだから、中隊本部には仕事山積してゐる。人手はいくらあつても足りない。右往左往して駆けまわつてゐる者や一日中机にかじりついて仕事に没頭してゐる者達を見ると、自分の病氣が情なく思はれて、身を切られるやうにつらい。然し病勢は悪化するばかりだ。便所に行く途中で幾度も倒れさうになる。

T 衛生兵や同郷の H 一等兵が、入院しなきや駄目だよ、とすゝめてゐたのを拒んできたが、かうなつては入院するより外にしかたはない。

進軍 故白木俊二郎君撮



「全快してうんと働いてもらうから、仕事の事は心配しないで一日も早く入院し給へ」と親切に云はれる中隊長殿の慈しみ深い言葉に甘えて、とうとう入院を決意した。

弱りきつてヨロ／＼はしてゐたが、中隊長殿以下みんなに入院の挨拶をして、T 衛生兵に附添はれて病院へ這入つた。

霧のやうな雨がしと／＼と降つてゐた。日用品をいれた風呂敷包をトげて、よろめきながら病院の門をくゞつた時の佳しさ。陽もとどかない深い谷底へひきいられるやうだ。

マラリヤの病名で入院したので、内科のたつ廣い病室へ入れられる。

病院といつても、この病院は K 部隊の第四野戦病院の分院で、Z 患者療養所と呼ばれてゐる。第一線の病院で、しかも分院だから、

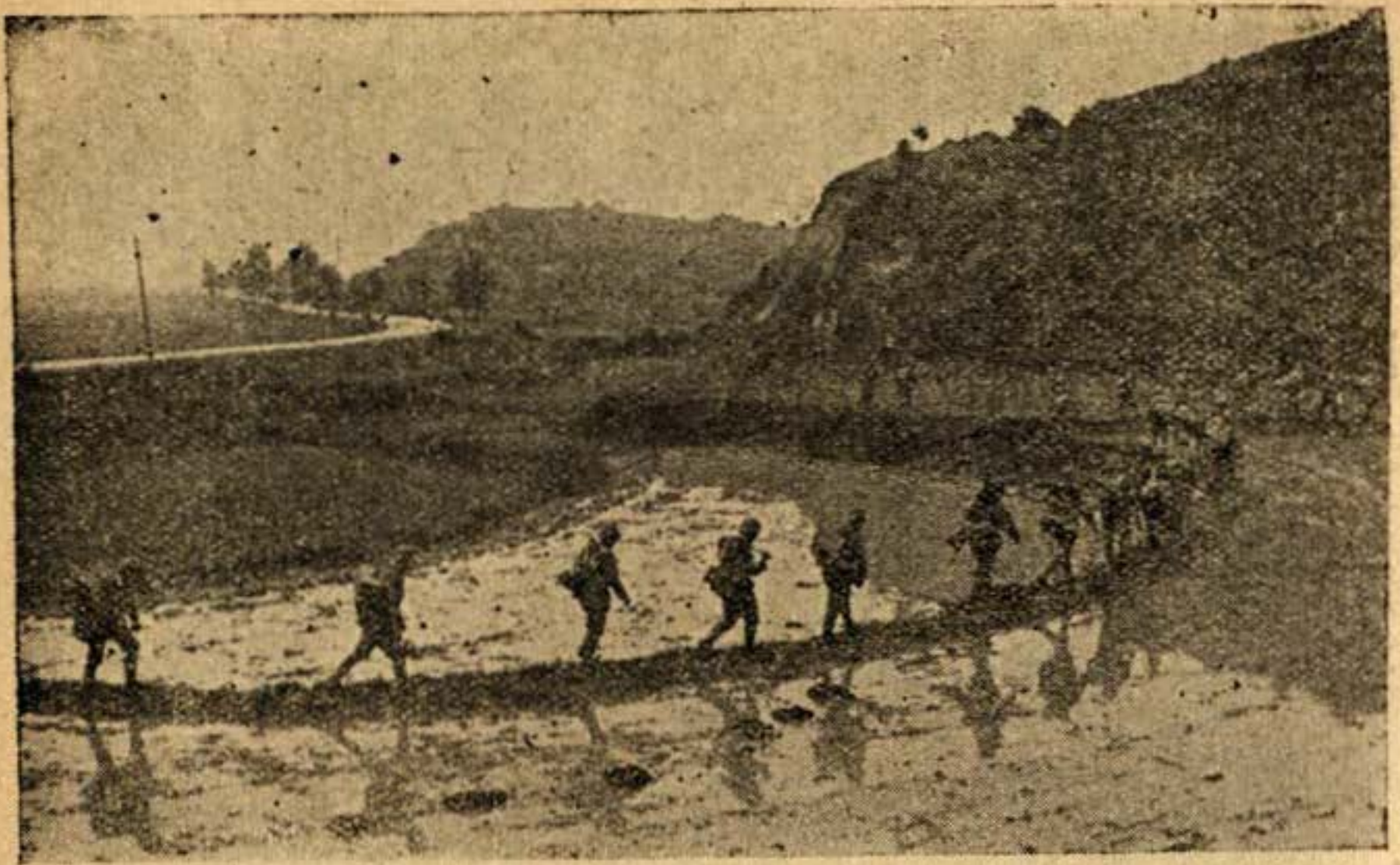
急造で設備は頗る不完全だ。相當大きな廟を改造したもので、私の這入つた病室は廟の拜殿でもあつたのか、十間四方もある廣い土間だ。それが横が一間半で高さが二尺位の板

をはりつめた四列の床でしきられてゐる。床と床との間には三尺ほどの狭い通路がある。床の上に藁か蓆を敷き、その上に毛布をひろげて寝るのだ、病衣などはもちろんない。私は幸にも戦友が支那の蒲團を假してくれたのでそれを敷いた。

一つの床に十人位ならんで寝てゐる。二列の床は患者で一ぱいだが、あとの二列はがら空きで、汚い藁や蓆が雜然と散らばつてゐるそれが妙に冷たい空氣を部屋中に漂はせてゐる。索莫たる病室だ。

夕方、今日入院した新患者の診察がある。立上れないほど苦しかつたが、氣をはりつめて診察室に行つて診てもらふ。診断中に冷汗が流れて目がくらみ、倒れさうになつた。軍醫殿が衛生兵に書きとらせてゐる病床日誌の言葉がぼんやり聞える。たゞ顔貌憔悴榮養不良の言葉だけがハッキリと耳底にやきつけられた。

夕食前に衛生兵が體溫をとつてくれたが、確かに四十度以上はあつたらしい。すぐ解熱



劑の注射をうつてくれた。だが熱は少しも下らない。食慾は全然なく、何もつけない。意識はハッキリしてゐて、衛生兵や患者達と元氣に話し合ふ。高熱のため耳が遠くなつたらしく、近くで話してゐる聲がぼんやりと聞える。やがて蚊の襲撃と電燈のない闇とに悩まされる恐ろしい夜が訪れて來た。

三月二十四日

昨夜はほとんど眠れなかつた。高熱のためからくだらない夢に悩まされつづけた。大きな果物屋の前に立つてゐる。飾窓には西瓜・梨・メロン等の私の好きな、しかも長い間食べない果物が美しく飾つてある。二階には喫茶室があるらしい。私は炎熱のために喘いでゐて、湿ききつてゐる。一刻も早く西瓜にかじりつきたい。メロンに飛びつきたい。急いで店へ這入らうとしたが、どうした

ことか、足は地の中に根を下ろしてもしたのか、ビクともしない。棒立ちになつたまゝ一歩も動けない。甘美な果物の香りが強く鼻をつく。食べたい。だが足は頑として動かない。果物の香りは次第に強くなる。食慾は狂るらしいまでに烈しくなる。もう我慢が出来ない。と突然、手が無意識に動いて、飾窓の大きなガラスをたゞき破つてしまつた。両手にはメロンがしつかりと握まれてゐた。店内から人々が恐ろしい顔をして飛び出して來た。しまつたと思つた瞬間に目が覺めた。

汗でシャツはビツシヨリ濡れてゐる、口はカラ／＼に渴いてゐて、呼吸するのに苦しい。急いで枕もとの水筒を手探りでとりよせて、ごくりと飲む。その美味しさつたらない。湿ききつてゐる口から咽喉に流れこんでゆく時は、ひからびてゐる大地が雨でしつとりと濡れてゆくやうな、すが／＼しい感じに充たされる。ほつとしたと思つたら、またす／＼と微睡み始める。

今度は大きな喫茶店に腰かけてゐる。目の



念 佛 更 生

金 田 明 進

おかげさま

昨年の夏、私どもの田舎は七十年ぶりの大水害に見舞はれました。稲の結實の大切なときに一月も冠水してゐたので、お百姓さんたちはどうしてよいかわからなかつたのです。水の中で稲がヒヨロ長く伸びてしまつて、水がひくとベツタリ地にねてしまつたりしました。七十年も前にやはりこんなことがあつたと老人たちは云ひますが、さてその時の處置については八十歳の老人もあまり子供だつたので覚えがないと云ふのです。水のひいたあとを稲の腐つたところ

ろなどは、遠方からとりよせた籾を播いたりしましたが、節はづれの播種ではやつぱりうまくなくて、お米はおろか、せいぜい粟をとる程度のものでした。

私は水びたしの農村のお檀家を小舟で見舞ひして歩きました、そのとき、ある一軒の農家で、「お寺さんからお見舞ひに来て貰つて誠に有難いことです、實は今家中であの通りお佛壇にお燈明をあげて、御先祖にお禮を申したところです。」とその主人が申します。

「いやそれは改まつてまたどう云ふわけ……」



歩兵上等兵 安田 秀賢

二、寺門出征

十月二十四日、午前四時、臨時召集令状を受取り、同月二十九日の入隊とすれば、二十八日に同郡知内港を出發せねばならぬ。

既教育後備兵、重機關銃隊員の私であつてみれば、入隊早々、下校部隊配屬は先づ覺悟を決めねばならぬ。

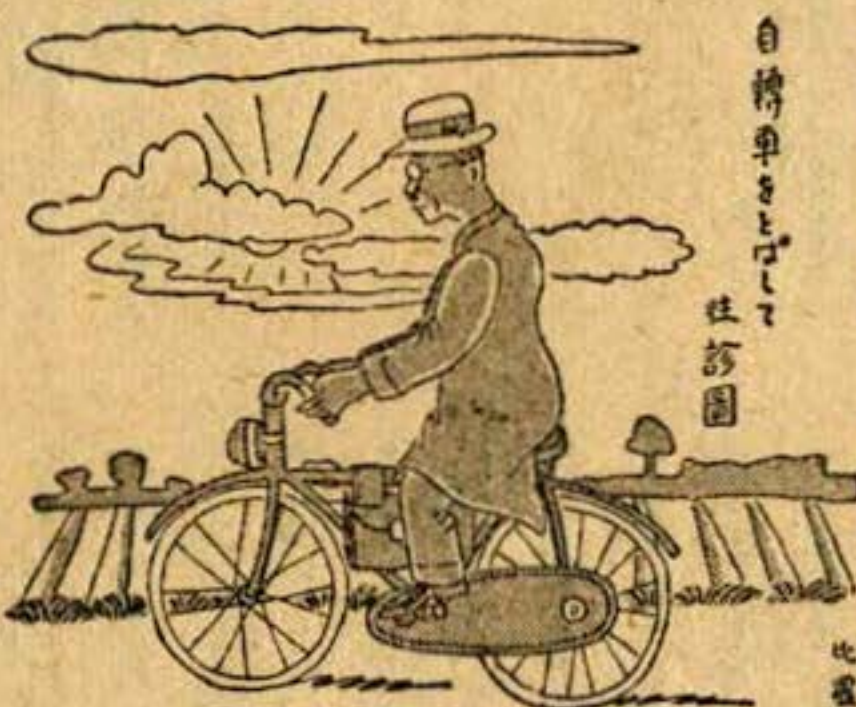
かねて用意の、臨終用工具箱の中の一品一品をよく改め、萬一、戦死公報後、處理すべき一切のことを、戦死遺言狀、として檀中腹心の者、二名、妻の三名のものに懇々と申渡して、漸くホツとする。

戦死遺言狀の内容は生きて歸つた今となつてみれば發表する意志は毛頭ない。

と問ひますと、

「まことに平生は先祖さまのおかげを忘れがちで申譯ないことです。この七十年ぶりの大水で始めてアリアリと先祖のおかげを感じました。それは、この母屋が他の家より特別高く土盛をしてあつて、いつもは出入に不便だと思つてゐました。ところが今度のやうな大水になつて隣近所の家がみな浸水したのにこの家は二代前の先祖が土盛をしておいでくれたおかげで浸水を免れたのです。」

この通り島のやうにこの母屋だけのこつて見ると始めて先祖が子孫のために、こんな低い土地にもかゝはらず、遠くから土を運んで高く土盛をしてくれたことをほんとうに感謝されます。それで今皆でお禮を申し



自轉車をとびして

往診圖

たところですよ」

とその主人は涙を流して申されました。先祖のおかげは私共の一息々々の中に流れ受けてゐるのです。それなのに、私たちはそれを忘れてゐることが多いのです。そして

先祖をけがし、子孫への使命を忘れたりするのです。先祖のおかげさまがわかることが「感恩」の第一歩と存じます。

念佛更生

霞ヶ浦の東岸の小川といふ町に櫻井先生と

いふお医者さまが居られます。誠に熱心なお念佛の信者であり、椎尾博士に永年御指導を受けて居られる方です。

この櫻井先生は數年前、知人がお金を銀行から借りるのに保証人になられた責任か

戦地にゆけば、もう旨いものも食へなからうと、料理屋からの色々の品を喰べても、まるで砂を噛むやうで味がなない。まるで感覺を忘失せる人間のやうで我れ乍ら不思議と思つた。

そして、私、出征後の一つ一つの注意のこと葉を、ボツリ、ボツリ、語ると養母も妻も、さめざめと泣くのみだ。

私は全く暗然として仕舞つた。この時ほど、寺門から出征することの如何に至難の道であるかをしじみと考へた。

殊に荒撫不毛、住職をしてから五年、その間に、本堂再建、庫裡新築、境内擴張の事業を竣工して間のなきこと、反轉懊惱の日が過ぎた。

笑ふ勿れ、卑怯なりと。私は文字を修飾して、私の勇武を語りたく無い。人間の當面せし、ドタン場の私自身その時、にじみ出た氣持をそのまゝつゞりたい。

やがて、明日出發の二十七日前夜、全權

ら、先祖からの土地や家屋を殆ど失はれることとなり、一時にまことに先祖に對して申譯ない、いつそのこと、死んでお詫をしやうとまで思ひ詰められたのでした。

ところが、その頃不思議な御縁で東京小石川傳通院で三日間の別時念佛の集ひがあるのに参加されました、豁然と道が開かれ念佛の中に更生の一路を見出されたのでした。

× ×

× ×

櫻井先生は「自分は醫者だ、今自分の不

一心不乱に念佛すれば、世間人面

紙屑薩のやうな頭は……」



明であつたために先祖から受けついだ多くの財産は手放さねばならない、しかし、それが先祖から受けたすべてではない、先祖から受けた最も尊いものは、この醫業に精進することだ、さうだ、何一つ無くなつてもよい、私には診察室一つ興へられ、ばよいのだ、私はすべてを失つて、より輕安な身と心になつて、わが天賦の聖業に突進しやう。さうだ、一度は死をも覺悟した私だ、これからはどんな惡質の病者をもつた患者に接しても、よしそれが感染して私の命を捧げることになつてもよい、私は私のすべてを捧げて診察治療のため醫者としての使命を完うしやう。櫻井先生はかう決心されてからは全く佛のやうな氣持ちで全ての患者に接することが出来たのです。又どんな深夜に遠距離の急患の家から招かれても、よろこんで自轉車をとばして往診されるのでした。そして櫻井先生の診察治療は、たゞ科學的なそれではなくして、患者の精神

中參集のもとに、別離のお勤めをした。ユラユラと黒赤く燃ゆるロウソクの光、立ちのぼる線香の煙、

私は檀中の者へ最後の法説をした。

「いままでの私のお前方へのお説教は、所謂文字の上から學んでのお話をしてゐた。いま私は、眞の無常の姿に立つてゐる。この私が戦場に行つて、死ぬか、生きるか、それは、如來様におまかせをして私は唯、戦ふのみ。會ふたものは必ず別離あり、請ふお念佛を透ふして、戦地の私と同行のお前方と心と心を結んでゐやう。私が一足お先へお淨土へゆけば、同行のお前方を待つてゐる。お前が先なれば、この私を」

尼講の女人達は内陣の中にある私の衣の袖にスガルモノ、墨の上に打ち伏して泣きわめくもの、この壯嚴なほのぐらい一堂の光景は、とても都會人士、都市寺院方の想像も及ばぬことであらう。

的方面にも親切に呼びかけられるのでした。全くそれから先生は念佛の中に醫をばげみ、念佛と共に人に接するのでした。

かくて櫻井先生はいかなる行詰りの中にも念佛信仰によつて明るく開かるゝ道あることを喜ばれ、今ではその地方の多くの人々から敬慕の的となり、自らも同人と共に絶えざる稱名生活に精進されて居られます。

相濟まぬ心

念佛同行の岡部さんは或る朝念佛のあとでかう語られました。「このごろは商人も統制々々とやかましく云はれてうまい商賣が出来ぬといふ聲を仲間の人々から聞きますが、私はお念佛のおかげで、どんなに統制されて來ても、これによつて段々國策に沿ふ正しい商賣が出来てくるのだといふ氣持ちで有難くなります。然し日用品を商する私達として、品切れをすることは誠に申

譯ないことだと存じます。相場の変動のある場合など、昔はよく賢惜しみや、品切れを平氣でされたものが、念佛をさせて頂いてゐると、折角お客様に來てもらつて店にあるべき品を缺かすことは何と相濟まぬことであるかとつくづく反省されます。

ことに申譯ないことは自分の身體の不調なことです。よく注意して眞に身體を大切にすれば、胃腸を悪くしたり、風邪を引いたりすることは無い筈です。それを自分の不注意から胃腸を損ねたりして、仕事に充分の力を注ぐことの出来ぬのは誠に申譯ないことです。私はこのごろ斯うも考へられるやうになり、朝毎のお念佛で、これらの至らぬ自分を心から懺悔して居ります」

念佛の中からはつゝましくも自分を反省する力が出て參ります。自分本位の考へが段々と取り去られて、お國の爲に捧げさるべき自分の姿が次第にハッキリ浮び上つて來ます。南無阿彌陀佛！

その夜も過ぎて、明くれば十月二十八日境内前には、出征安田秀賢師、祝……幾本もの長旗が風になびく。

本堂前に軍服姿でそゝり立ち、軍靴の紐



をむすびて立てば養母は泣いて「ドウカ、生キテ生キテ、カエツテ」心中に躍り狂ふ出征の感激の心地に發散せる私は、樂隊の音、もろとも、ドンドンと歡送の人にもまれて行く、(つづく)



阪根翁のこと

吉田 絃二郎

明治二十一年ころのことである。知恩院の財政はほとんど救ふべからざる窮境に陥つてゐたことがあつた。總本山の建物は某銀行に差押へられ、やがてはアメリカ人に賣られて、山門もろとも米國に運ばれてゆくといふやうな話が持ち上つて來た。

翁は毎朝知恩院の苔むした石磴を一步一步踏みしめて念佛を唱へながら、幾度か悵然として朝霧につゝまれたあの大伽藍を見上げては、まさに絶えなんとする法燈を想ひ、そゞろに涙を催した。

眞葛ヶ原の露しげく、落萩の花の色にも人知れず阪根翁は胸を痛めて朝ごとの参詣に静かな坂道をたどつて行つた。

「知恩院をこのまゝにして置くわけには行かない」といふ考は一般の信徒達の胸に動いて來た。知恩院の大廣間に世話人たちの寄合が催された。まづ知恩院の事務所に行つて見ると一人の事務員も踏みとゞまつてゐる者はなゝといふ有様である。閑古鳥が鳴くといふ有様はこれであらう。いざ食事の支度にとりかゝらうとすると、米屋にしても豆腐屋にしても先づ現金を頂戴いたしましてからといふ挨拶である。寄合の信徒たちもあまりのことに啞然たるありさまである。「いかに末世とはいへこれが總本山の姿であらうか。あまりにもいたましい姿だ！」ひそかに涙をしぼつた信徒も二人や三人ではなかつたであらう。

寄合もすんで暗い心をさらに暗くして翁は外に出た。御本堂の姿までが何となくうら寂しい。長い登の上を歩いてゐると自分の足音までが、地に吸ひこまれて行くやうに思はれる。山門の屋根に鳩が鳴いてゐた。今日は鳩の聲も虚にひびく。何気なく山門を見るとあの蒼古そのものの、尊さをこめた山門の柱に貼紙がしてある。

何者の無知、何者の無耻！ あの尊い山門に貼紙をしたといふ一事でも義憤を感じないではをれないに、ましてその貼紙には知恩院の建物を競賣に附すといふ非情の文字が書きつらねられてある。これこそまことに末世末法の姿といふべきものであらう。

「元祖様に相すまぬ」翁は山門の前で泣いてしまつた。

それにしても往來の人も多い山門の貼紙をこのまゝに曝して置くといふことは何としても忍びがたいことである。それかといつて法律の定めるところによつて、執達吏が貼つたであらう貼紙を勝手に除くことはゆるされない。翁は山門の前に佇立して苦慮悲愁するのみであつた。恰度その時翁の傍に立つてゐた某氏が「それならこの貼紙はわしが破つて棄てませう。無論法律の罪を着て、

わたしは牢に入らなければなりませんまいが、後のことはあなたにお頼みいたします。」と言下に貼紙を剥ぎ取つて破いてしまつた。この人はきはめて氣一本な純情の人であつた。折悪しく係りの判事が通り合はせたが、さすがに判事も心ある男で、このことは不問に附してしまつた。

×

翁が一生の間に鹿谷法然院、北野轉法輪寺をはじめ或は廢寺を復興し、傾く寺運を挽回したことはずゑぶんだ多いことであるが、なかんづくこのをりの知恩院復興についての粉骨碎身の奉仕といふものはなみなみならぬことであつた。

「元祖様に對して相すまぬ」といふたゞこの一念のために、それ以來翁はまつたく寢食を忘れて同志十人と相謀り、信徒有力者間を奔走してつひにその目的を達するこゝとができた。或る人が「あなたのやうになさつては第一あなたの家がつぶれませう」と忠告した。

翁はその時「いや、わたくしどもの家といふものは何うしても潰れる時が來れば潰れる。ですから潰れたらそ

れまで仕方がない。しかし御本山はさういふわけには参りませぬ。わたくしどもの家はいくつ潰しても御本山さへつゞけばこの上の仕合はありません。」これが翁の返事であつた。

×

舊約の約百記を讀むとヨブといふ人間の篤い信仰と人間苦といふものに打ち耐へる力の尊さが記されてある。

ヨブは幾人の子供と幾千頭の家畜と莫大な富を恵まれてゐた、しかも境遇は一朝にして變つた。かれはすべての子供たちをも、家畜をも失つてしまつた。天上から一舉に奈落の底に突き落された。しかもその懊惱のどん底に呻きながらもヨブの言つた言葉は「神われに與へたまふ。故に神すべてをわれより奪ひ給ふ」であつた。

昔から大きな人格の一生をかへりみると、ヨブに似た試験がたいていは伴うてゐる。聖人孔子にも顔淵の死があつた。そして孔子をして「顔淵死。噫、天喪レ予。天喪レ予。」と長歎息せしめた不幸人があり、法然上人のお弟子さまの中にも上人に惜まれて天死した人もあつた。

あれほど人に對して慈悲ふかく、佛に對して一切を投げ棄てゝかゝつた阪根翁にも不仕合があつた。

翁には彌太郎といふ子供さんがをられた。まことにすぐれた性格の青年で、阪根翁の性格をそのまゝ受け繼いで來たやうな人であつた。學問の方からいつてもそのころ京都にたゞ一つしかなかつた府立中學に入つて、いつも一番の席順を某氏と争つてゐたほどの秀才であつた。その競争相手といふのは後に陸軍に入つて中將になつた人である。

明治二十八年に京都に博覽會が開催された時彌太郎氏は書記の役を勤めたことがあつたが、當時まだほんの一青年に過ぎなかつた彌太郎氏の才能には當時の事務官たちも驚いて「阪根たゞ一人さへをれば充分だ」と評したさうである。この一言から想像しても若い彌太郎氏がいかなる人であつたかといふことは想像がつく。

親孝行であり、頭腦もすぐれ、誰にも愛されてゐた彌太郎氏は父にも世間の人々にも大きな將來を期待されてゐたが、間もなく不治の病を得、下京の本光院に一室を借り受け、姉上の手あつて看護の裡に讀經念佛の靜かな

日を送り、若くして大往生を遂げられた。

この逆縁の悲しみ、まして世にもすぐれた天資を供へたたゞ一人の男の子を失つた阪根翁の悲痛な心根を想像することはできる。阪根翁も亦舊約の物語にあるヨブの悲しみを苦しんだ人である。

「本山のためには自分はずぶれても」といふ篤い信仰心は、ヨブの「神われに與へたまふ故に神すべてをわれより奪ひたまふ」といふ信念であり、さらに一層静かな尊いさとりの言葉でさへある。

この逆縁の悲しみに逢うて翁はどんなにか、人知れず腸を斷つ思ひに泣いたことであらう。しかし翁は失望自失することなく、一日一日と靜かに御佛の大慈悲につつまれて信仰の道を一層深く進んで行つた。

さきにちよつと書いて置いたかの關通上人の縁からして安樂寺、圓通寺の世話や、東山西光寺の合衆念佛會の發起などと、翁はひたすら信仰の一路を辿つて行つた。

X

X

X

X

X

X

御法語 渡世の道

一七三 問ていはく、念佛の行者は、つねにいかやうにかおもひ候べき。答ていはく、あるときには世間の無常なる事をおもひて、このよのいくほどなき事をしれ、ある時には、佛の本願をおもひてかならずむかへ給へと申せ、ある時には、人身のうけがたきことはりをおもひて、このたびむなしくやまん事をかなしめ、六道をめぐるに、人身をうくる事は、梵天より糸をくだして、大海のそこなる針のあなをとをさんがごとしといへり。ある時は、あひがたき佛法にあへり。このたび出離の業をうへずば、いつをか期すべきとおもふべき也。ひとたび惡道に墮しぬれば、阿僧祇劫をふれども三寶の御名をきかず、いかにいはんやふかく信ずる事をえんや。ある時には、わが身の宿善をよろこぶべし。かしこきもいやしきも人おほしといへども、佛法を信じ淨土をねがふものはまれなり。信ずるまでこそかたからめ、そしりにくみて惡道の因をのみつくる。しかるにこれを信じこれを貴びて、佛をたのみ忘生を志す、これひとへに善善のしからしむる也。たゞ今生のはげにあらず、往生すべき期のいたれる也とたのもしくよろこぶべし。かやうの事を、ありにしたがひ事によりておもふべき也。

(法語抄より)

れまで仕方がない。しかし御本山はさういふわけには参りませぬ。わたくしどもの家はいくつ潰しても御本山さへつゞけばこの上の仕合はありません。」これが翁の返事であつた。

×

舊約の約百記を讀むとヨブといふ人間の篤い信仰と人間苦といふものに打ち耐へる力の尊さが記されてある。

ヨブは幾人の子供と幾千頭の家畜と莫大な富を恵まれてゐた、しかも境遇は一朝にして變つた。かれはすべての子供たちをも、家畜をも失つてしまつた。天上から一擧に奈落の底に突き落された。しかもその懊惱のどん底に呻きながらもヨブの言つた言葉は「神われに與へたまふ。故に神すべてをわれより奪ひ給ふ」であつた。

昔から大きな人格の一生をかへりみると、ヨブに似た試練がたいていは伴うてゐる。聖人孔子にも顔淵の死があつた。そして孔子をして「顔淵死。噫、天喪レ予。天喪レ予。」と長歎息せしめた不幸人があり、法然上人のお弟子さまの中にも上人に惜まれて天死した人もあつた。

あれほど人に對して慈悲ふかく、佛に對して一切を投げ棄てゝかゝつた阪根翁にも不仕合があつた。

翁には彌太郎といふ子供さんがをられた。まことにすぐれた性格の青年で、阪根翁の性格をそのまゝ受け繼いで來たやうな人であつた。學問の方からいつてもそのころ京都にたゞ一つしかなかつた府立中學に入つて、いつも一番の席順を某氏と争つてゐたほどの秀才であつた。その競争相手といふのは後に陸軍に入つて中將になつた人である。

明治二十八年に京都に博覽會が開催された時彌太郎氏は書記の役を勤めたことがあつたが、當時まだほんの一年に過ぎなかつた彌太郎氏の才能には當時の事務官たちも驚いて「阪根たゞ一人さへをれば充分だ」と評したさうである。この一言から想像しても若い彌太郎氏がいかなる人であつたかといふことは想像がつく。

親孝行であり、頭惱もすぐれ、誰にも愛されてゐた彌太郎氏は父にも世間の人々にも大きな將來を期待されてゐたが、間もなく不治の病を得、下京の本光院に一室を借り受け、姉上の手あつて看護の裡に讀經念佛の靜かな

日を送り、若くして大往生を遂げられた。

この逆縁の悲しみ、まして世にもすぐれた天資を供へた一人の男の子を失つた阪根翁の悲痛な心根を想像することはできる。阪根翁も亦舊約の物語にあるヨブの悲しみを苦しんだ人である。

「本山のためには自分はずぶれても」といふ篤い信仰心は、ヨブの「神われに與へたまふ故に神すべてをわれより奪ひたまふ」といふ信念であり、さらに一層靜かな尊いさとりの言葉でさへある。

この逆縁の悲しみに逢うて翁はどんなにか、人知れず腸を斷つ思ひに泣いたことであらう。しかし翁は失望自失することなく、一日一日と靜かに御佛の大慈悲につつまれて信仰の道を一層深く進んで行つた。

さきにちよつと書いて置いたかの關通上人の縁からして安樂寺、圓通寺の世話や、東山西光寺の合衆念佛會の發起などと、翁はひたすら信仰の一路を辿つて行つた。

X

X

X

X

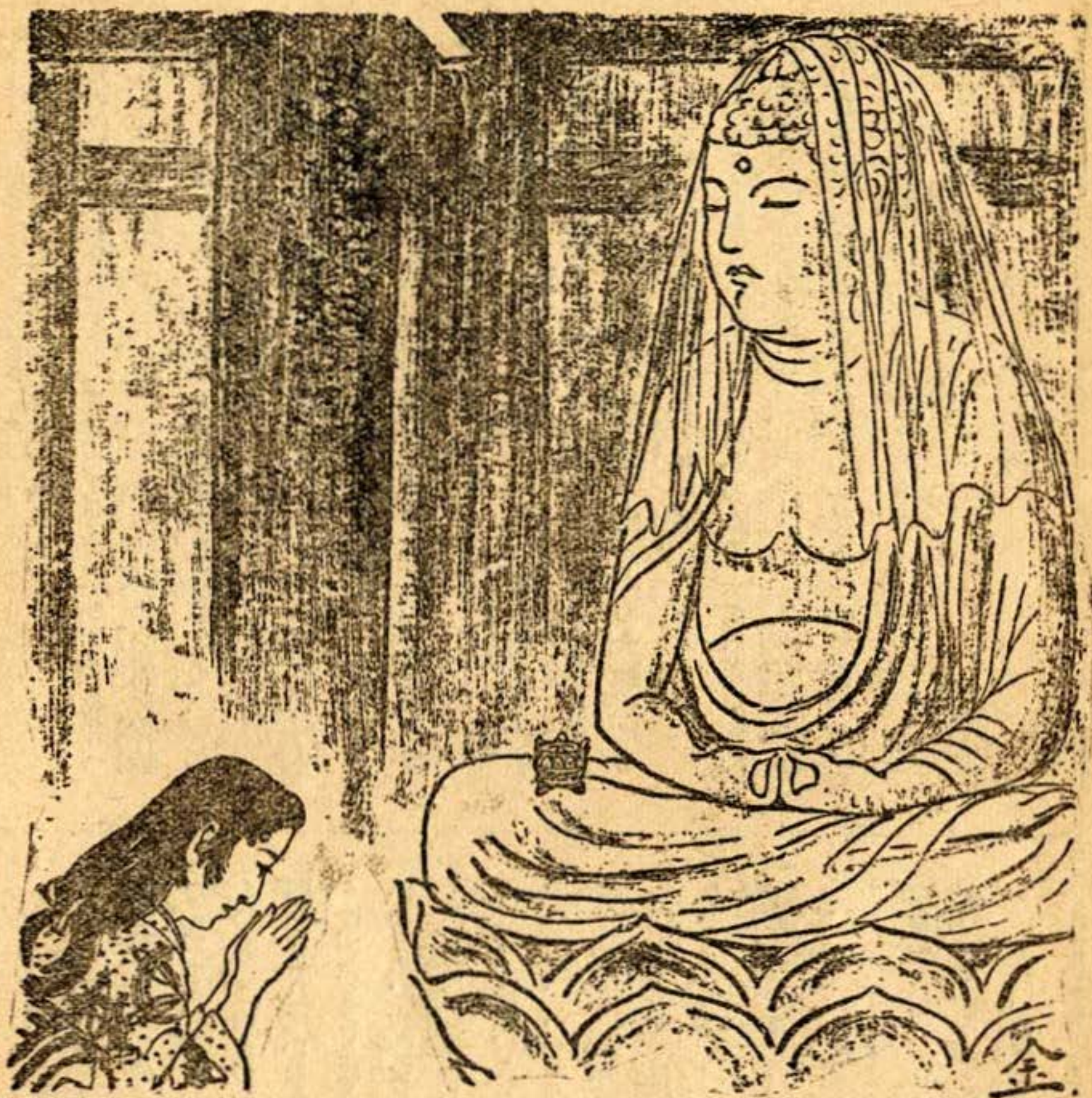
X

X

御法語 渡世の道

一七三 問ていはく、念佛の行者は、つねにいかやうにかおもひ候べき。答ていはく、あるときには世間の無常なる事をおもひて、このよのいくほどなき事をしれ、ある時には、佛の本願をおもひてかならずむかへ給へと申せ、ある時には、人身のうけがたきことはりをおもひて、このたびむなしくやまん事をかなしめ、六道をめぐるに、人身をうくる事は、梵天より衆をくだして、大海のそこなる針のあなをとをさんがごとしといへり。ある時は、あひがたき佛法にあへり。このたび出離の業をうへずば、いつをか期すべきとおもふべき也。ひとたび惡道に墮しぬれば、阿僧祇劫をふれども三寶の御名をきかず、いかにいはんやふかく信ずる事をえんや。ある時には、わが身の宿善をよろこぶべし。かしこきもいやしきも人おほしといへども、佛法を信じ淨土をねがふものはまれなり。信ずるまでこそかたからめ、そしりにくみて惡道の因をのみつくる。しかるにこれを信じこれを貴びて、佛をたのみ忘生を志す、これひとへに宿善のしからしむる也。たゞ今生のはげにあらず、往生すべき期のいたれる也とたのもしくよろこぶべし。かやうの事を、ありにしたがひ事によりておもふべき也。

(法語抄より)



子_こ神_みの熊_{くま}の猪_み

小

説

郎 一 信 西 葛
畫 平 金 木 鈴

元和の末の年と言ひますから、徳川三代將軍家光公が征夷大將軍に任ぜられた年です。京都四條猪熊に一人の年老つた神子が居りました。何といふ名であつたか傳はつて居りません。それ程有名でなかつたのか、それとも、此の話を最初、世に傳へた本性寺の住職、淺井了意と云ふ人が、大體、同じ時代の人だつたので、この婆さんの名譽を思つて、故意と、書かなかつたのかも知れません。

扱、其日も、よく晴れた氣持のいい日でした。黄金色の公孫樹の上の方には、遠い南の國の海が映つてゐるのかと思はれる程、底深い感じのする青空が擴つてゐました。

その青空の中を、時々、敏捷な魚が泳ぐ様に、スイーと小鸟が横分ると、公孫樹の葉がハラ／＼散るのでした。

「不思議なもんじやな。」

婆さんは首をかしげました。板を離れた枯葉が宙に躍るのを見てゐると、何か、音が聞える様に思はれるのです。その反對に、いよく、その葉が地に着くと、其時、微かな音を立てるのですが、反つて音もなく、ひっそりと横たはる様に思はれるのです。葉の飄るのは、何か滑稽な様でもあり、

大空一杯に齒のない口を開けた妖怪が指の先に火を燃してゐる様にも見えませんでした。それが、地上に横たはる時は、丁度、婆さんの心臓の上へ、一枚一枚、何か言ひ知れぬ恐怖の影が重なつて行く様でした。

「婆さん、何を考へとるの？」

不意に、そんな聲が直ぐ耳の傍でしました。婆さんは、死神に咽喉をギョツと握まれた様に喫驚して振向きしました。一人の老僧が立つてゐます。何處で折つて來たのか、枝つきの柿を、ぶら下げてゐます。白い衣と、赤い柿の色とが、何故か、婆さんの眼に、しみ込む様に鮮かに映りました。長い、眞白な眉毛の下から穏やかな瞳が、ニコ／＼と微笑みかけてゐます。其の眼を見ると、婆さんは、氣安さと同時に、馬鹿にされた様な腹立たしさを押へる事が出来ませんでした。

「おーお。びつ／＼しましたよ。何處の坊様ぞいな。」

それには、答へようともせず、柿の枝をつき出して

「一つ食はんかの？」

「ま、ま、此方へござれ。」

暫らく、柿と坊様とを見較べてゐた婆さんが、縁側へ案内しました。何時か、茶が出、粗末ながら煎餅も出、老人二人は、四方山話に打興じてゐます。

「婆さんには子供はないのかの？」

「娘が一人あるわの。俺の口から言ふも可笑しな話じやが、器量よしでの、親孝行で……」

婆さんは娘の顔を想ひ浮べる様に、一寸、言葉を切りました。

「一緒に暮しておいでか？」

「いや何しろ、俺の商賣が商賣ですぞ。」

「結構な商賣ではないか。神様のお取次、占兆もなさる様じやが、いづれ、神易と云ふ物には、玄妙な道理があるのであらう？」

「年寄に恥をかゝすものではないよ。」

婆さんは心持、顔を赤らめました。婆さんは、神道の道理など、霊程も知りませんでした。長い間、口から出任せを並べて、女子供を脅しつけて、色々な物を騙り取つて暮して來たのです。老僧は暫らく婆さんの顔を見てゐましたが、

「恥かしいと思ふ様な商賣は止めては、どうじやの？」

婆さんは俄に、きつとなりました。

「この商賣を止めて、何をして、食ふて行く事が出来るぞい！」

「成程。我等は弱い人間じや。口過の爲には、悪いと知りつゝも、種々な事をせにやならんでなア。」

「俺は悪いとは思ふて居らぬ！」

「之は！ハッハッハ。お腹立では困る。どりや歸らう。」

老僧は、ゆつくりと腰を上げて二三歩行きましたが、ふと、振返つ

て、

「ま、ま、信心第一じや。懺悔を忘れさつしやるな。弱い故の悪事は、佛様のお眼からは悪事ではないのじや、懺悔、懺悔。後生の爲にもな」

老僧は其儘、遠ざかつて行きました。

「糞屋らしい！」

婆さんは、老僧の後姿へ、拳を振上げました。が、いよ／＼、一人になると、胸の真中に、ポツカリと大きい穴が開いた様に感じました。譯の分らない涙が、その穴の中へ、ポタリ、ポタリと落ちて行きます。風もないのに、ハラリ、ハラリと散る公孫樹の黄葉が、その涙と交つて、音もなく、積み重なつて行きます——

二

其の翌日から、婆さんは寝込んでしまひました。風邪でも引いたのでせう。頭が、づき／＼痛んで、食欲がすっかり無くなつてしまつたのです。近所に家がない上、皆から嫌はれてゐる婆さんの事です。誰一人として見舞に來てくれる者はありません。唯、閉め切つた縁側の戸に、散つて來る木の葉が幽かな音を立てるだけでした。その音さへ、婆さんには、死神の足音としか聞えませんでした。

（癡つたら、早速、お寺詣りをしよう）

婆さんは、さう、思ひました。でも、自分の罪深さを考へると、今

更、お許しを乞ふのが如何にも、圖々しい事の様に思へるのです。

（散々、悪い事をして置いて、鯉のいゝ事を言ふな。お前なんか地獄へ行くのが當り前だ）

さう、佛様から叱られる様な氣がしました。其度に、——弱い故の悪事は、佛様のお眼から見れば、悪事ではないのじや——と云ふ囁きが耳許で起り、老僧の憐れむ様な眼差が闇の中に浮んで來るのでした。

六日目の朝、やつとこさと起き上ると、婆さんは、ふらつく足許に氣をつけながら、北野の朝日寺へ詣でました。

「佛様。私は悪い奴でござります。此年になるまで、身過ぎの爲とは申しながら、人様をたぶらかし、神佛の教に外れた行ばかりして参りました。今更、こんな厚かましい分に過ぎたお願いの出来る譯はないのです、何卒大慈悲をもちまして、恥かしい死様を世



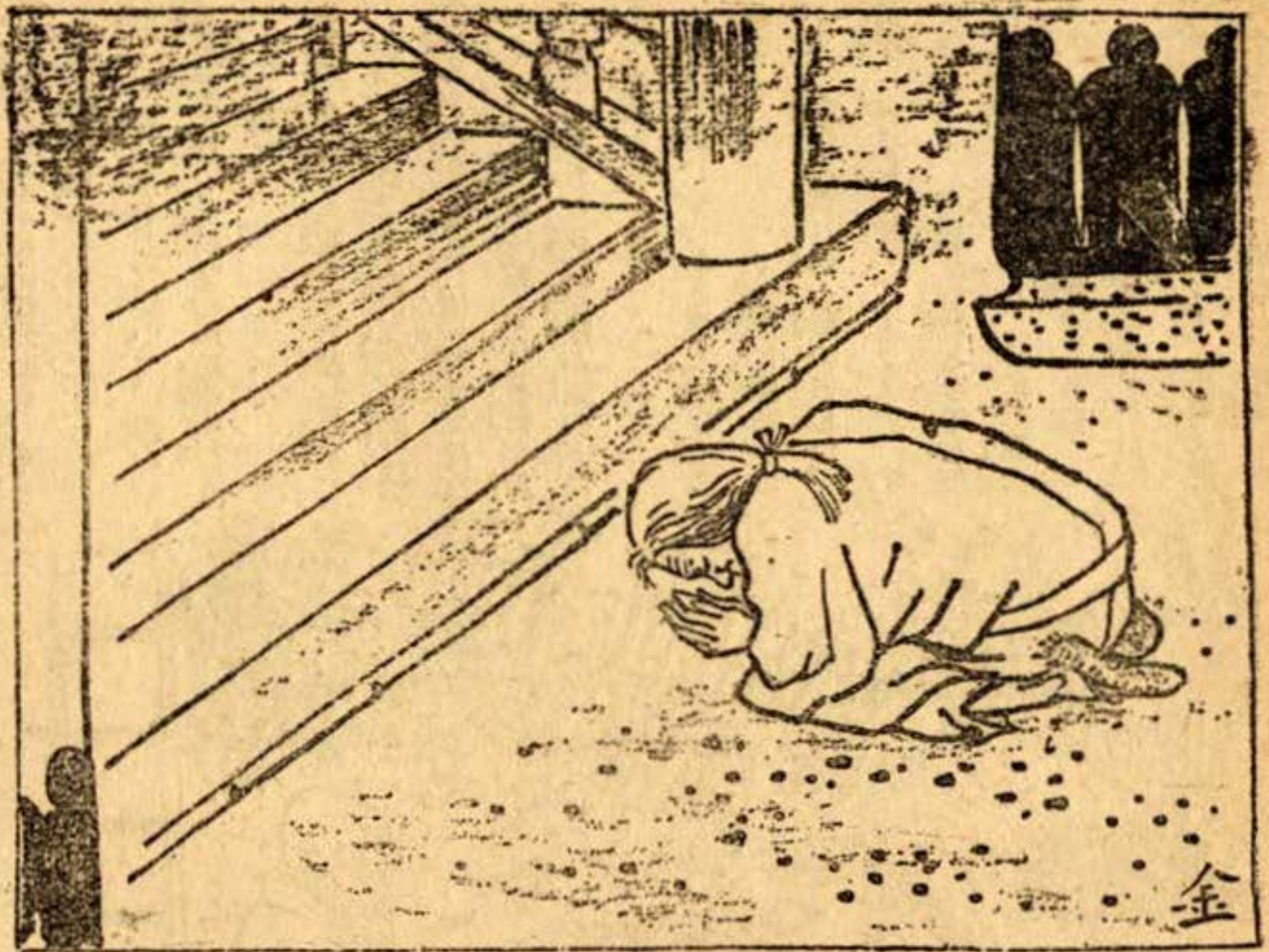
間の前に曝さぬよう、死しての後には我が魂を助けて給はるよう、お願いでございます、お願いでございます。」

婆さんは土の上へ坐つて、土に喰ひつく様に頭を下げて祈りました。お祈りをしてゐる間に、止度もなく、涙が溢れ出て來るのです。（何卒）と云ふ泣聲だけは、參詣の他の人にも聞き取れる程でしたが、婆さんは、他に、人が居ようが居なからうが、只一心に、かきくどき、佛の慈悲を祈るのでした。

婆さんが頭をすりつけてゐた地面が涙にぬれて、婆さんの顔を黒く描き出す頃、婆さんは、やつと、立ち上つて、家へ歸つて行きました。

それから後は、雨が降らうが、風が吹かうが、婆さんの姿は、毎朝、朝日寺の御堂の前に見られました。

佛様の前で懺悔すればする程、自分の罪深さが、はつきりと判つて來ました。罪の深い事を自覺すればする程、懺悔の



涙は多くなるのでした。

婆さんが毎日坐る場所は、終には、凹みが出来、土は餘り澤山、涙を吸ひ込んだので、今はすっかり婆さんに同情して、婆さんがほんの少し泣き始めたばかりで、貰ひ泣きする程になりました。

三

前略

そもじさまにも、ぶじ、宮づかへまかりありとおぼえ候。年比は、みこの娘と、指さゝれたまはんも口惜しく、母は里のありさま深くをしかくし、便りもせで過ぎて候か、この日比、心地あしく、今生のをはりとこそ存じ候へ。

あはれ、此世のいとまごひなれば、人にはしのびて、はや／＼かへりたまひ、そもじ様のおんかは一目なりと見せてたびたまへ

あら／＼

たど／＼しい筆蹟が娘の所へ届けられたのは、寛永元年も押しつまつた、巷には節季候の聲が忙しさに走り廻る頃で、京の街々には、昨夜からの雪が、また、降續いてゐました。

取る物も取り敢へず匿けつけた娘に、婆さんは、

「よく、歸つて来てくれたね」

と嬉しさに言つたゞけで、娘に手を取られて、安らかに眼を閉じました。

雪は息んだとはいへ、短い冬の日、早くも暮れて、隣近所から離れて神子の家には油もなく、暗闇が急速に降りて来るのでした。

娘は只、泣き沈むばかりで、どうしてよいかわかりません。

其時です。ヒタ／＼と外の雪を踏んで近づいて来る足音がありません。

「此處だ、此處だ」

と云ふ聲がすると、表の戸がガタ／＼と開いて、雪明りの中に、四、五人の若い僧を従へた老僧が立つてゐるのが見えました。娘は知りませんでした。が、婆さんに、「後生を願へ」とすゝめた例の老僧に違ひありません。

「娘御かの？」

「はい」。

娘は訝しさに一行の姿を見守りました。

「我等は北野の朝日寺の僧でおじやるが、この婆殿は常日比、朝日寺に詣でられて、我等とは知合でござつた。死んだなら、お葬の事を宜しく頼むと、衆々、頼まれて居りましたでな、棺を用意して來ましたじや。ウム？ あゝ、火葬は阿彌陀ヶ峯でいとなみますじや。我等、よく／＼跡をとぶらうて進ぜます程に、來世の事も御心配なならぬようにな」

老僧は、さう言つて、若い僧達を差圖して婆さんの屍の仕末をするのでした。

考へて見れば變な話です。第一、婆さんの死んだのは、つい、先刻の事です。そして、婆さんの死んだのを知つてゐるのは、この娘だけです。しかも、この娘は、先刻から、婆さんの死骸の傍から一步も離れて居りません。誰が一體、朝日寺へ知らせたのでせう。

でも、途方に暮れてゐた娘は、悲しい中にも、まアよかつたと、安心したと見え、只不思議な坊様達の親切を深く感謝するばかりです。

「あの、お名前は何とおつしやいますのでございませう」

「あゝ我か？ 我はの、朝日寺の正觀房と云ふ者じや」

「朝日寺の正觀房様。有難うございます。母の靈も何ぼ、喜びますことか。ほんとうにお禮の申しようもございませぬ」

娘は何度も禮を繰返して述べた後、

「過急の場合とて、何の持合せもございませぬが」

と、白い薄衣と蒔繪の香合を取かしさに差出した。老僧は、柔和な微笑と共に、快く受取つて、雪道を消えて行つた。

四

「正觀房？ 其様な名の僧は、當寺には居りませぬが……」

「まア！ でも、確かに、此處と聞いて參つたのでございしますが……」

被衣を、やゝ、持ち上げる様にして、考へ顔の僧を見つめたのは、昨夜の娘です。

「しかし……」

「此處は朝日寺でございませう？」

「左様。朝日寺には間違ひはありませんね」

「あの、北野には、他に朝日寺と申すお寺がございませうか？」

「いや、當寺だけです」

「確かに、正觀房様とおつしやる……」

「存じませぬ、いや、確かに、其様な方は、當寺にはございませぬ」

僧は、諄いーとばかり、きつぱり言ひ切りました。娘は困惑した

様に、立ちつくしてゐます。氣の毒になつたのでせう。僧は、語調を

柔らげて、

「何處か、他寺を尋ねて御覽なさりませ」

娘は、失禮を詫びた後、悄然と歩き出しました。

一體、如何したと言ふのでせう。悪戯にしては念の入り過ぎた話で

す。さりとて、何の値打もない老婆の死體を騙り取つて何になると云

ふのでせう。

（幾ら母様が悪い人だとして、死體を隠さなくても、よい筈じゃー）

こんなに母は、世間から憎まれてゐたのであらうかと、娘は、悲し

くなりました。

（せめて母の後生をお願ひして歸りませう）

娘は御堂へ上つて行きました。心の中ではどうしても、謎が解けま

せん。

（こんな不思議な事が、世の中にあるものかしら？）

娘は袈衣を取つて靜かに眼を上げました。その視線が、正面の御本尊に注がれた時、

「あッー」

娘の胸が劇しく起伏して、眼は大きく睜られました。

正面に、神々しくも坐し給ふ阿彌陀如來、その頭上に打被ぎ給ふ

は、昨夜、參らせた白の薄衣ではありませんか！

香合は御膝の上にのせてありました。

娘の膝が、わな／＼と震えました。がつくりと膝を落すと、娘の手

は自然と合掌して、稱號が泉の様に、清い涙と共に、後から、後から

と湧き上つて來るのです。

（終）

御投稿についての御注意

本誌は、信仰のための皆様の雑誌で御座いますので御投書は大いに歓迎しますが、左の點にお注意下さいます様にお願ひします。

- 一、原稿用紙をお使ひになること。
- 一、四千字以内のこと。
- 一、本誌の體裁と一致するやうな内容のもの。
- 一、紙數に制限がありますから取捨は編輯部に御一任下さること。原稿は原則として御返却いたしません。

俳壇

大田 耳動子



香川県 荒木 はち

秋の蚊のなごりとむる痛さかな

評—秋も末の、大いに見極つて問題にしなかつた蚊に、びつくりする程強く刺されたと云ふのである。印象明瞭なものよく、中七字がとみに活躍してゐる。

静岡県竹田海軍病院

泉 鳥 雲

階に月光落ちてすさまじき

評—「すさまじき」と云ふ表現は随分のやうに思はれるが此の場合、一落ちと一と相俟つて、非常に力強く迫るものがある。べつとり月光に塗られて、段々が消えて了つてゐる様に思はれる。

青森市 高 松 秋 水

木枯や冷水摩擦のほとりより

評—身を切る様に寒い木枯の吹く日に、冷水摩擦をやつてゐると、此の木枯が、自分にだけ集つて吹きつけてゐるやうにさへ思はれる、と云ふのを、斯う表現したので、下五の見方も、表現も優れてゐる。

和歌山 岡 本 一 節

庵より庵の徑の虫時雨

東京市 三野 輪 幸 郎

普請場は檜の香り蟬の聲

小樽市 平 井 善 慈

親も子も虹の輪を見て午睡覺む

新宮市 奥 村 映 水

炭を焼く子の父にしてかくしやくと

牛田市 岡 瀬 龜 鶴

松影に汐ひたくと月の夜を

山口縣 長 岡 見 智

張り替へし障子に月の上りけり

香川縣 山 下 破 竹 子

兄 取 死

雲無しと言ひ切つて秋たゞ淋し

名古屋市 友 淵 梨 枝 雄

法隆寺に詣で、子規を偲び

松の鐘夢殿邊り晝かすか

青森縣 佐 々 木 亮 光

僧房の夜は虫の音につゝまれて

石川縣 西 村 けん 治 郎

山寺の僧とも見えず報恩講

群馬縣 設 楽 香 圓

夕月に鉢を洗へば光るなり

大阪市 太 川 一 敏

秋めくや呉服賣場の目も彩に

栃木縣 大 輪 雲 海

松虫や鮎釣り竿の置き處

静岡県 桑 子 菊 江

虫なきてびんのほつるゝ頃となる

前橋市 瀧 澤 全 盛

秋空に澄みきる嶺の紆かな

川崎市 高 橋 東 舟

秋の夜の暗き灯に木綿むく

東京市 野 念

秋ばれを阿彌陀詣での蹴出しかな

千葉縣 安 田 九 卓

家の何處かきしむ音して秋深し

名古屋市 岡 田 曉 雲

軒端の灯まばらとなりぬ萩の風

滋賀縣 重 野 ふ み 子

雞頭あげて花瓶小さきお厨子かな

香川縣 堀 家 信 之

病床の寝静まりたり虫の聲

新潟縣 西 尾 伯 東

防人の漕ぐ鐵舟に秋光る

高崎市 渡 邊 清

雲荒れる紅葉より雁渡るなり

香川縣 日 向 法 圓

穂すゝきに初葺二枚とらしあり

青森縣 佐 々 木 孤 月

突風を紙片の如き蝶々かな

京都市 永 田 七 郎

ケーブルカー萩を闊して登りけり

京都市 片 尾 恵 雄

カンナの新静かに蝶の舞ひよれる

青森市 高 松 竹 堂

果柿の燈のゆたかに匂ひ未だ暑し

大分縣 石 堂 柚 山 生

土の香の身にしみてくる墓前かな

青森市 櫻 田 三 千 郎

湯溜りの傷兵に秋忍びより

滋賀縣 尾 崎 正 男

蟬蛸の芒に重し秋の影

廣島市 小 堀 邦 香

爪先にひかれて芝の道の露

千葉縣 安 田 九 卓

萩の露にしとど濡れゐて百度石

大阪市 栗 生 智 信

草むらのさびしくなるや虫の聲

會 津 縣 藤 澤 舟

突き放つ貨車はなれゆく穂置かな

大阪市 森 正 義

菊の鉢さゝげて乗りし電車かな

宇都宮 後 藤 新 八

名月に入火を入れたりき素焼窯

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「薄土」欄欄部併係あて送ること。



魂の再會

|| 淨き友の會問答 ||

— 魂 —

淨き友の會も益々堅實な歩みを送つてゐ、十月の集ひも二十數名の參會あり、また會規も定つて會員の結束懇親に資する迄に、自然的な生長をして來た。この進展については逸早く力説された熱信者も居られたが、何事も總

再

會

員の意向が全面的に發露される迄自然に任したいとの漸進主義から、今日に及んでゐたものである。阿彌陀經の講話も十月を以て終り十一月からは法語抄の講贊に移ることとなつた。尙ほ會の記録を忘失した爲座談會記事を暫く中絶したが、要望の聲が強いので、記者

の聞覚えに依て綴つてみることにした。三月頃の例會の一夜は淨土に於ける魂の再會は可能であるかとの、誠に重大な困難な問題について座談がはづんだ。問の提起者は

昨多糟糠の夫人を喪れての深い哀痛から信仰を求められ、荏原區戸越行慶寺支部小俣眞誠師から淨土誌を勧められた因縁で此の會へも來られた荏原の江角金市氏で、流石に眞剣な念慮に眼を輝かしての質問であつた。

「淨土の吉田絃二郎先生の隨筆を私は殊に嬉しく拜見してゐます。吉田先生のあの深い愁歎、奥襟を想はれる氣持、あの文々句々皆私には我が想ひの儘を表現して戴いてゐるかの如くに感ぜらるるのです。私の亡くなつた家内は唯だ糟糠の生活とのみ共にして漸くゆとりある愉悅も與へ得やうかとの頃に死なれたので、殆んど生前何等の樂みも與へ得なかつたことを想ふと、何とも言へぬ哀愁の念に打たれるのです。此の日夜を、私も亦た未來世に

於いて再び逢へるならばと念願してゐます。

吉田先生が「わたくしは淨土の存在を知らない。しかし私は淨土を欣求する。かつて永遠に別れて行つた、親しき者との再會を祈念する」と言はれた言葉は、眞實の體感です。私もさうありたいと念ふ。しかし魂の再會といふことは本當に可能でせうか。

忽ちに會員の中から慰めの言葉や相互の囁きやらが起つた。まあ幸せな奥襟ですわ、とか。本當に皆が皆江角さんのやうな方ですとねえ、とか。様々な人生經驗を経て信仰を得られた會員の方々丈に、愛情の絆の美しさに打たれることであつた。殊に橋本女史であつたか、次のやうな意味の言葉は、全女性の氣持を代表せられてゐるやうに思つた。

「私の亡夫は相當我儘な喧嘩屋でしたし實に甚しい生活の困苦をも殆んど左右も知らぬ身で忍苦して到頭今日迄來たのですが、死別してみると、どんなに生活が苦しくてもどんなに事へ難い時であつても、夫に事へて共に生活の苦悶と戦つた日々が女には一番幸福であつたと思ひます。永患をされてゐたその看病の日夜がどんなにか充實した悦びであつたかは別れて始めて痛感したことでした。江角さんの奥様も、きつと生活が豊かでやれ芝居だデパートだと遊び廻るどんな方々よりも、どんなにかお二人の生活を喜んでいらつしたと思ひます。況して女には夫の愛情以上のどんな歡びもないのですから、貴方のそのお氣持丈でも奥様は最上の淨土にいらつしやることとは確ですわ。死後の再會が出来るにしろ出來ないにしろ、さうして奥様を偲んで念佛されてゆく處に、現に奥様と再會していらつしやると思ひます。云々」

江角さんの質問には、尙ほ死後の靈魂の存在とか、死靈との相會とか、色々豫備的な質

問が例會毎に一二回繰返されたことであつたが、それらの核心はやはり亡き奥様との淨土の再會を希念される點にあつたのである。中村先生のその夜の解答は殊に問題が重大な丈に佛教々理上の難しい理論を平易にして種々悉しく答へられたのであつたが、その全貌は筆記がないので素養の貧しい筆者には到底書記せないから、中心點のみを簡略に叙述しよう。本來なら先生に見て頂くのであるが、今はその餘裕もないから、一斑を見て全般を推測して頂く外はない。それに嘗て先生御自身で信仰相談欄に死後の靈魂の問題につき解答せられてゐる筈だから、讀者はそれも併せ讀まれると幸甚である。

先生のお答は一般論と特殊論との二つに分たれる。そして一般論は佛教々理上から、特殊論は淨土の信仰上から述べてゐられる。

「先づ前にも申しましたやうに、佛教では死後の靈魂の存在の有無を申さぬのです。佛教では一般の人々が考へてゐられるやうな何か存在論的な死後の存続には否定的なのです。

我は現象の上の假の結縛です。我々の肉體精神を構成してゐるものには何ら個在的主體からの要素はない。五蘊假和合です。私といふ者があつて私の誕生があり、現象世界が現れるのではないのです。因縁の總和に依て私といふ姿が可能であり、その統合を我と呼んでゐるのです。引寄せて結べは草の庵ですが、解けば元の草野原となると同一です。從つて死後の靈魂の個體的存続は言はない。尤もそれだからと言つて死ねば皆無だとする虛無的見解ではないのです。私といふ現實の存在も大いなる生命力の一つの現れでありますから此の生命が最もよく活き働くときそれは全體生命に強い影響關連を有つことでせうし、此の生命體が解體して全體生命に歸入する場合にもそれは全體生命の大きな強い力となつて各方面に作用しゆくことでもありませう。

三界六道の輪廻とか生死流轉とかの説も、他の時に詳しく申上げる機會があると思ひますが、通常考へられてゐることは少し違ふと思ひます。それは要するに迷へる生の相で

す。個體執着、我執のわざはひよりする相です。我々を形成する單細胞が已一個の生命存在に執らはれて生きたとしたらどうでせう。生命の涅槃、病患が現はれるに違ひない。迷相、流轉相なりと指摘せらるゝ我々の現實も大いなる生命の中にあるを忘れた單細胞の生於とも言ひ得るでせう。

斯様に佛教の輪廻説は個在の轉生をいふのではなく、惑業苦の轉々生死を指すのです。普通三界六道の輪廻轉生といふと因果應報説を想起せられるでせうが、佛教は因果論ではなく起説ですから、科學的な單純な原因結果論ではない、小因大果、無因有果をも説くのです。應報説も業感縁起説であつて、業因果

報といふので、業力に引かれて生死流轉の生活現象の相續變移が行はれると説く。分り易い例を上げれば車夫は車夫らしく、商人は商人らしく、拘摸は拘摸らしく、觀者らしい相になつて、慣れた客引や仲居等は一見して客の職業を觀破し得ると申しますが、我々の肉體動作の上にも斯る作用が認められるのです

から、此の世此の身の果報が、業力の因に引かれて種々様々の相として生起するとのことは肯定出来るでせう。

要するに業感縁起といふのは此の現象世界の成立存續を惑業苦の酬因感果の上に置く説であり、不生不滅の涅槃の證得に依つて輪廻相を解脱すべしと説くものです。此の説が元になつて、輪耶縁起とか眞如縁起とか法界縁起とかの諸縁起説が起つてゐますが、詳しい説明は今省きませう。

そこで、我々の肉體が滅んでも尙ほ存續すべき何らかの現象生起の作用力を肯定するとしても、御主人と奥様との業力の酬因感果は異つて來ますから、死後に於ける魂の再會といふ様なことは不可能のことです。あり得ゝからざることです。このことは斷定出來ます。

中村先生の此の第一の斷定に、會衆の胸には、人間の有つ悲しい運命について佳しい諦観が去來した。殊に江角さんは寂しい顔付きになつたし。しかし、先生、業の一致といふこ

とも考へられないでせうか。しかし、それでは人類永久の希望は適へられないのでせうか。その顔、その眼、その口は、さう問はうとしてゐたらう、「しかし……」と嚙し口ごもるのであつた。中村先生は、更に言葉をついて語られる。

「それでは魂の再會は全く不可能かと申しますと、私は決してさうであるとは思ひません。時處諸縁に於て同一であり能はぬ運命の魂が、若し再會し得るとするならば、何に依て、また如何なる方法に依てでありませう。私は無量壽・無量光である。阿彌陀佛の御力と念佛の信仰に依る以外にはないと信じます。吉田先生や江角さんが如何に奥様を戀ひ慕はれても、人間の執着として動いてゐるのである限りでは、再會の希望はありませぬ。

このことの實現の爲には、み佛の大願業力に繼る外はありませぬ。自らの小さな業力に依ては不可能であります。み佛の強い増上縁、即ちお引立のみ力に依て、始めて可能と

なるであらうと存じます。眞に念佛の信仰に依てゆく外はないと思ふのであります。佛様の大きな力を仰いでそれに随いつつ自らの信念を増上すると共に、また奥様の回向を頼み参らすることが大切であります。奥様をも同じ浄土の信仰の中に抱きとるのでなくてはなりません。この悲願の涙なくしては、奥様はその業力の果報を感じゆくに外ないのでありますから、み佛の大慈悲力に依て奥様をも浄土に救ひ参らすやう、祈念回向申上げねばならないと存じます。遠くからそゞろ温かい親の慈愛力が子の悪心をも離へす感化力を有つてゐるやうに、迷へる衆生の大御親なるみ佛の力は、やがて貴方の念願を通じて、奥様の魂の上に導きの光明を照し給ふことでせう。

我々は愛する者達との浄土に於ける再會を信じて居ります。後世を願ふ、と昔の人達の申しましたのも、此の温かい愛の力だと思ひます。眞摯に後世を願つてさしあげて下さい。そこに同生安樂國、共に極樂の蓮の上に生れ

んとの回向文の眞意もありませう。地上に於て生活を共にする多くの人々、己れと生活の哀樂を分か合つた方々、同信同行、念佛のみに依て一蓮托生の日を期して下さい。

各留半坐乘華臺、待我閻浮同行人と申すではありませんか。既に奥様はこの句のやうであるかも知れません。否な、少くとも、奥様を回向し参りつつ貴方が信仰を増進してゆかれるならば、奥様は浄土にて貴方との再會を待たるるものと言つてよいと思ひます。

法然上人も浄土の再會を深く信じて居られました。

露の身はここかしこにてきえぬとも

心はおなじはなのうてなぞ

法然上人の御歌と同じ信仰に生きて頂くと

ころに、さ迷へる魂の救ひが實現すると存

じます。この同じ道を共に歩みたいと思ひ

ます。さすれば、何日かは、貴方の疑念も春

の雪のやうに解ける日が來ると信じます。

中村先生は、かうした趣旨で、魂の再會

なる離問題に最後の斷を與へられた。そして

會衆と共に靜かに珠數をつまぐつて、心に念佛せらるるのであつた。

尙十一月の會の案内は五七頁に出てをりますが、

十一月十九日には夕刻より念佛會を催しますから奮つて御参加下さい。

淨き友の會規則要項

第一條 本會を淨き友の會と稱し事務所を東京市本郷區東片町七八番地に置く。

第二條 本會は浄土の信仰を養ひ法然上人の人格に學び以て皇恩佛恩に報答せんとするを目的とす。

第三條 前條の目的を達せんが爲に左の事業を行ふ。

一、毎月二回講話會並に信仰座談會

一、毎年一回大會

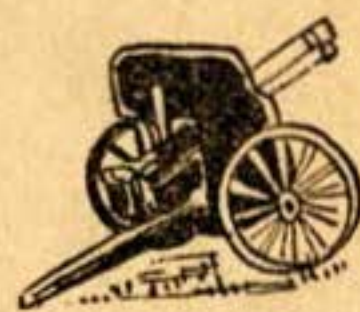
一、雜誌「浄土」の購讀及普及

一、靈蹟參拜旅行

一、其他必要な事項

第四條 本會の目的に賛同し入會する者を以て會員とす

第六條 本會の經費は會費及淨財を以て支辨す會員の會費は毎月金貳拾錢とし例會の時納入するものとす



戦 争 と 宗 教 家

北 林 透 馬

ドイツとソビエツトとが不侵略協定を結んだ、と言ふ時から、とかく世の中がうるさくなつて來たやうだ。

今まで、不世出の偉人のやうに褒めたゝえてゐたヒトラーを、急にひどく嘔吐きの不道徳漢のやうに悪聲を放ち始めた……と言ふやうなのはまだ好いとしても

『だから日本人は正直すぎて不可ん！』

など、自分が日本人であることも忘れたやうに、日本人の正直なのを今更のやうに叱つたりする。

正直すぎて叱られるのも可笑しな話だが、叱られてゐる當人よりは、叱る日本人の方が

よつほど馬鹿化て見えるのは事實だらう。

この夏、ぐるりともう一度、北支から南支をまわつて來てみたが、何處へ行つても、そんな風な——つまり、自分が日本人だと言ふ事を忘れたのか、知らないのか、矢張り日本人のやることを叱つてばかりゐるやうな——日本人が居るのにぶつかつて、少々情ないやうな氣持だつた。

軍人以外の日本人が、どうも大陸へ行つて餘り評判が好くないのは、無論素質の悪い日本人が少なからず行つてゐるからには違ひないが、あまり何うも悪い點ばかりをお互ひに摘發し合ふやうな傾向もあり、實際以上に悪

聲が放たれてゐるらしい、と言ふことを感じないわけにはゆかない。

悪い日本人よりは、良い日本人の方が餘計行つてゐるのだし、蕭々と建設的な仕事もしてゐるのだし、何うせ何もかもブチこわされた燒野原の上に、東亜の新秩序と言ふ奴を、急速に建設して行かなければならないんだから、其處に無理のあるのは當り前の事でありそんな點は出來るだけ見通してやるのが、ほんとうの日本人同志の愛情と言ふものではあるまいか。

事變の當初「何やらの聖者」とまで内地に喧傳されてゐた北京の或る日本人が、現地に

行つてみると

「あんなインチキ野郎はありませんよ」

とクソミソの評判だ、と言ふのはまだ好いとしても、そんなニュースを手柄紙に吹聴して歩く日本人や、得意になつて内地の新聞雑誌に書き立てる日本人の氣持のケチ臭さは、單にケチ臭いと言つただけではすまされないほどの淺間しさを感ずる。

どうせ、飯を喰ひ、女房を持ち、クソをたれてゐる人間に、傳説やお伽噺の聖者が存在し得るわけのものではない。

と言つたら、本誌の讀者は怒るかも知れないが、聖者と言ふものは半ば、人間の「理想への憧憬」が無理につくりあげる場合が多く現實に生きて呼吸をしてゐる時には、過失もあり缺點もある「一人の人間」にきまつてゐる。

僕は北京の聖者に直接會つたわけでは無いから、何ともハッキリした事は言ひかねる、だが、とに角「仕事」をしてゐるのは事實であり、その仕事の色々と良い結果をあげてゐる

るのは事實なのだから、強いて僕から、同じ日本人がケチをつけたるには當らないだらうと思ふ。

聖者なら聖者で好いから、周囲の人間が本當の聖者にしてしまつたら好いではないか。

妙な惡言を放つたりするのは、折角の建設をブチこわすことにもなり、支那人の日本人に對する折角の信用と信頼とを、わざ／＼壊つてしまふやうなものだ。

北京の聖者氏と同じやうな仕事を、上海でやつてゐる人がある。

これは何う言ふものか、あまり内地に知られてゐないが、上海の浦東で、而も女の手でやつてゐるのである。

二・二六事件の山岸中尉の姉さん、と言へば、知つてゐる讀者もあらうと思ふが、事實當初北支にゐて、男のやうな軍装に長靴、軍帽で前線を駆けまわり「婦人公論」などに従軍記を發表してゐた山岸多喜子氏である。

その山岸女史が、上海の對岸の浦東で、支那人少女を集めて「婦女協進會」と言ふもの

を作り、一種の宣傳工作をやつてゐる。

浦東は、東京で言ふと江東地區に當る上海の工場地帯で、つひこの間此處のイギリス人の工場で支那人がストライキを起したりした。

上海の心臓部たる共同租界、フランス租界とは、黄浦江をはさんで對峙する位置にあり各國人の經營する各種大工場の他に、廣大な農場地帯があつて、上海へ這入る野菜物の大部分は、この浦東から生産される。

現在海軍陸戰隊が駐屯して治安の維持にあたつてゐるが、住民は三十萬人を數へて、むしろ事變前より住み好くなつた。と支那人たちが言つてゐるさうだ。

「婦女協進會」は山岸女史の獨力で始められ當初は色々話も出来ないほどの苦勞があつたらしいが、現在では虹口サイドの日本人の婦人達が參與して、着々と効果をあげつゝある。

かう言ふ仕事こそは、大いに佛教關係の人たち、殊にその關係の婦人達の、まづ手を染めるべき仕事ではあるまいか、と思ふ仕事を

やつてゐる宗教家には一人も出會はなかつたこれは僕の見落しだらう、とは思つてゐるが——

宗教の仕事など云ふものは、生きて動いてゐる人間を相手にすべきで、その點、どうも佛教關係の人よりもキリスト教關係の人たちのほうが活動的であり、所謂新興宗教の人たちは、更に大陸に進出して、積極的であるやうである。

滿洲國の某新興宗教移民村は最も成功した移民村の一つであり、上海事變突發當時の、同じ宗教の人たちの活動は、軍當局から大いに賞讃されたほど勇敢なものであつた。

とも角も「宗教團體」と言ふものは、國家の重要な文化戰の一つである。單に集められた人間の數や、物質的な財産だけでも相當のものだらうが、それ以上に、信仰に依て結びついた、人間と人間の魂の結合、及びその總和は、とても物質では計量しきれない大きな財産だと思ふ。

國家として、それを利用せざる法は無く、

また國家の命令なくとも、宗教團體自身これを自發的に國家の用に供しなうと言ふ法は無いのである。

例へば、本誌の如き雜誌でも、これを單に國內信徒の相互的な機關たるに止むることに満足すべきで無く、建設さるべき新秩序に依る大陸に、國家の宣傳機關、宣傳機關としての積極的な活動こそ望ましく、國內信徒の精神的團結と、財力とは、そのくらひのことを悠に成し遂げ得ると思ふのである。

而も、それらの事は、すべて自發的に、誰にも先んじて成されなければならない。

支那語ペーヂを作り、若き、野心ある、青年宗教家を大陸に派遣し、一步一步あせらずに進んで行けば好いのだ。

今日からだつて、直ぐに出来るのだ。

ヨーロッパには今、戦争が起らうとしつゝある。

ドイツとソビエットの不侵略協定と、イタリアの中立的態度とを見て、氣の早い日本人は、とやかくヒトラーやムツソリニに不信な

言葉を放つたりしてゐるが、人間と言ふものは、そんなに不信用なものでは無い。

赤色革命の混亂に陥つたドイツを、その混亂から救ふ爲には「反共主義」の國家主義ナチイズムを唱へるより仕方が無く、ヒトラーのナチイズムは殆んど宗教的とも言ふべき「魂の結合」だつたのである。事情はムツソリニのファシズムも同様である。

國內統一の爲のナチス理論が、國內統一を完成した時には、失地回復の爲の防共協定に變つた。

併し、この協定は、ドイツに於ては、日本に於けるその如き觀念的なものでは無く、ソビエットを牽制すると同時に、英佛をも牽制すべき、現實的政治協定にすぎなかつたのである。

チエツコはこれを利用して併合した。

ではポーランドは？

失地回復、國權回復のために、觀念的な防共協定を實際的な獨ソ不侵略協定に變更した



支那の小藝人 故白木俊二郎君撮

のに何の不思議も無く、ポーランドに軍を進める時、英佛の積極的行動を刺戟しない爲にイタリイが嚴然として中立を持してゐるのはヒトラー・ムツソリニの相互信頼のますく固きを思はしめるのみである。

日本は、イタリイと共に中立を保持し、極東の實權を握つて動かざれば、これでポーランド問題も亦、一局地問題として解決し得る道は充分にある。

歐洲に眼を向けるな、と言ふ議論が一部指導階級の間に行はれてゐるらしいが、野中の一軒家で無い以上、極東も亦ヨーロッパから無關係ではあり得ないのだ。

本誌が發行される頃には、どんな局面が展開するか豫想もつかないが、今日(九月七日)の状態ではイタリイは寂として動かず、フランス側イギリス側の宣傳にかゝはらず、ベルリンからは依然として「西部戦線異狀ナシ」を報じてゐる。

ロンドン電報が、ドイツ潜航艇の英船爆沈を報ずれば、同時にベルリン電報は、それは英國がアメリカを刺戟する爲に、自國潜航艇がやつたのだ、と報ずるし、するとロンドン電報は、右ドイツ潜航艇は英軍艦が爆沈したとまた報ずる。

宣戰布告して五日もたつのに、要もない商船の沈めこや、敵機の來ない空襲警報ばかりである。

かう言ふ歐洲の狀態をふさいで、アジアにだけ新秩序を建設する、と言ふことは出来なと思ふし。これは丁度大陸に眼をふさいで内地の事だけやらう。と言ふのにも似てゐやう。

世界の狀態も、内地の狀態も、決して複雑でも無ければ怪奇でもなく、それはたゞ一本の簡単な線に依つて貫かれてゐるのだ。

宗教にたづさはる人々の任務と言ふものは仲々に重大だと言ふことを自負しなければ不可い。

ヨーロッパの狀態は、併し、ヒットラーのムツソリニの、更にチエンバレンの意志をも蹂躪して、戦争は或程度まで擴大化することとは不可避であらう。

提出された現象の奥にあるものを、ハツキリと把握すべきである。



支那はよいところ

一瀬秀雄中尉

眞野先生

(前略) 先生にはすつかり元氣になられた由、心からお喜び申上ます。私もおかげで元氣です。近頃

は大分忙がしいのですが、忙がしいのが當り前ですから平氣です。

私の所屬部隊が變り只今はこの〇

〇に來てゐます。電燈がつきま

す。去年の一月に一度、四月に第

二回目、七月に約一ヶ月だけ電燈

の光りを見て以來、たい今は一年

振りの電燈です。懐かしい部隊か

ら遠く(約十三里)離れて私獨り

電燈の下に(夜八時—十一時頃)

あるかと思ふと全く申譯ない氣持で一杯です。小隊のものたちに見せたら、きつと「電氣々々」と云つて叫ぶことでせう。おかしなもので電燈の下だとローソクが馬鹿み

たいに見えます。(一本のローソクを散々有難かつたのも忘れて)

聞あたりと云ふところです。

當地は晝は暑いが夜は可成冷えます。沼地が多いので、ホタルが大變なものです。美しいと云ふよ

リスゴイ感じですよ。

この邊は山のない所です。川が

あります、「可成川幅が廣いね」と

思つたら、川幅が九町二十間ばか

りあります。雨が降るとこの川が大増水です。一間や二間の増水で

はありません。實際支那の廣さは

目で見ないと一寸判りません。

内地の風景を考へただけでも狭

苦しくて頭が痛くなります。白髪

三千丈のある支那は仲々よいところ

です。兵士達も支那の土地は皆

氣に入つてゐるやうです。

くれぐれも御自愛の程を 草々

戦團と信仰

辻重光少尉

(前略) 四月の大逆襲戦の時は随

分彼地此地と戦ひました。中隊長

部下の少數をなくし誠に残念でし

た。しかし南昌攻撃戦より敵兵を

澤山殲しながら驚きました。

戦團中は友軍の殲れてゐるのを

見るとむかつ腹が立つてくやしく

て耐りません。敵兵の殲れててゐ

るのは實に愉快です。戦團が終つ

て彼地此地と犬や猫のやうに葬ふ

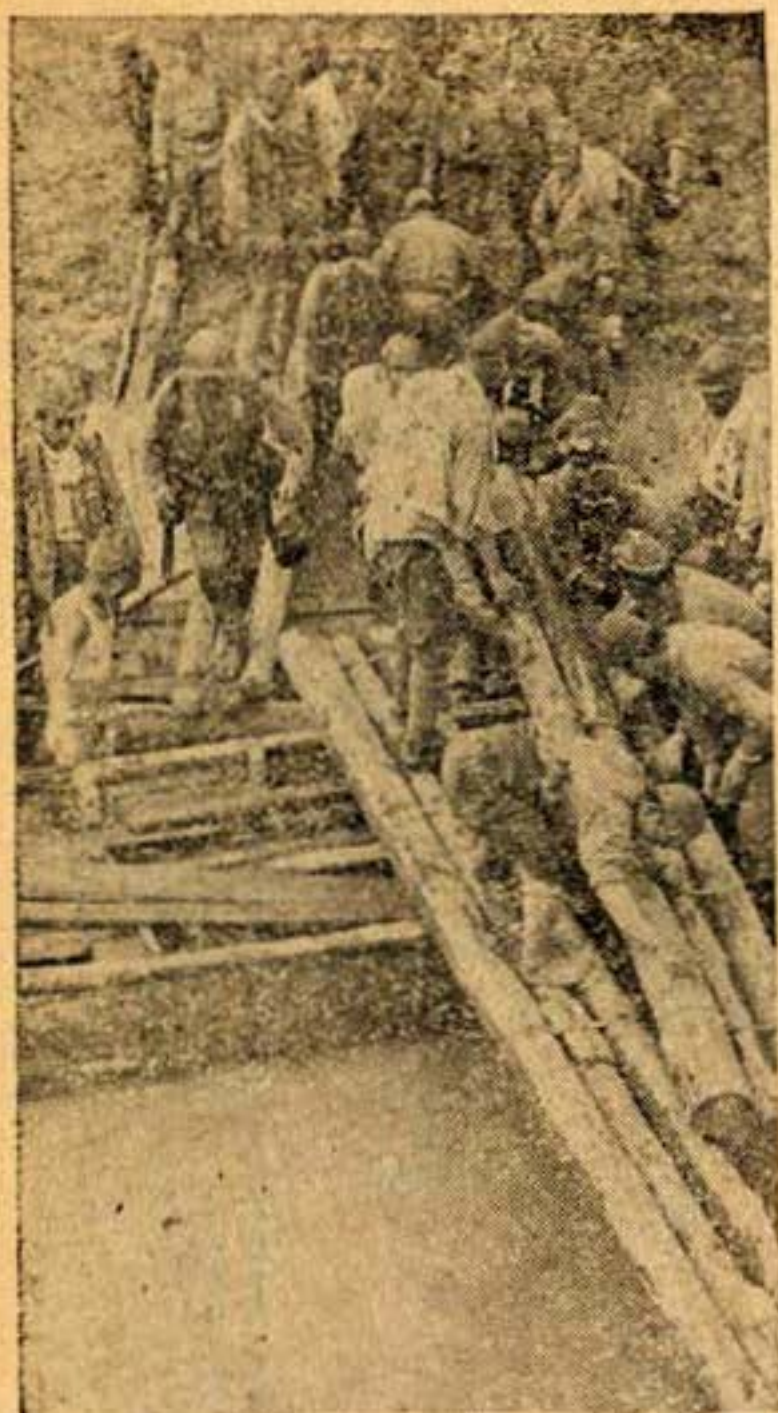
人もなく殲れてゐる敵兵を見ると思はず合唱念佛を唱へます。お施餓鬼位はしてやらなくてはと思ひます。

戦地にあると井の中の蛙で全般的狀態は解りませんが、戦争はこれからだ痛切に感じます。

山奥、田舎、如何なる處でも抗日宣傳が行届いてゐます。日常使ふ洗面器の中にも抗日文字が書かれてゐます。

當地は破壊から建設に日夜營々たるものがあります。電燈もつき出しました。日本、朝鮮の商人が續々來て商賣を始め街は正に日本街です。

兵隊に對し信仰の事を時々聞べて見ると、東京人の多い我が部隊では殆んどありません。いざ戦が始まる時には皆な神佛に祈る様ですが、戦が終ると忘れてゐる様で



契橋 故白木俊二郎君撮

す。

信仰のある人は戦が終ると祈る。大いに異ふと痛切に感じます。

我田引水ではありませんが信仰のある者は良い任務を遂行します。

戦地にゐる兵隊に信仰を植へるのは駄目です。いや困難です。信仰は内地で静かな折に植なければ仲間容易でないと感じております。

可笑しいニュー ス映畫

一瀬中尉

東京はまだ秋だらうと思ひます。當地は夜はグット冷えますが、晝は未だ當分暑いこととせう。その代り冬は暖かだと思ひます。昨年(しんねん)は外套を着る程度の寒さは数日しかありませんでしたが、今年は昨年よりずっと南方に來てゐるの(な)で尙更暖か(な)でせう。(中略)

先日當地で各新聞社のニュースが上映(とうえい)(露天にて)され、まあ二年振りの映畫を観ました。ところが観てゐる兵士達は自分等がとれてゐる寫眞をみながらゲラ／＼笑つてゐるのです。小生も實はおかしく感じました。これが内地で流行してゐるのかと思ふと少なからず珍妙(めんめう)でありました。實寫(じつしや)なのだから嚴肅(げんそう)であるべきが珍妙とは？ 要するに小生等兵士の實驗する戦(いくさ)と寫眞により表現される戦(いくさ)が餘りにも相異(さうい)し、代々木あたりの演習をとつたといふ感じしかない(な)ので、一同は笑ひ、變に感じ、興ざめした次第(しだい)であります。あんなニュース映畫なら観ない方が餘程よいかと存じます。

只今所屬部隊が變りまして〇〇市にゐます。毎日の生活には少しも困ることがありません。相變ら

ず元氣で軍務に忙殺されてゐます。東君は残念がつてゐることだらうと思ひ、お氣の毒の感がしきりです。その内に東京の方へ來れば南支(なんし)の話が聞けると思ひます。

先日辻重光氏に逢ひました、久しぶりでした。この一ケ年に三回しか逢つてゐません。彼は元氣でした。まつ黒にやけた顔を輝かせ武勇傳(ぶゆうでん)をしてくれました。逢ふ度に「もう駄目かと思つた」と云ひます。すると小生がその度(たび)に「よく無事だつたなア」と云ひます。彼は實に勇敢(ゆうかん)です。小生が餘り無茶するなよと云ひますと、彼はヂット小生の顔(かお)をみつめます。眞剣(しんけん)な一瞬(いつしん)です。

當地は未だ支那人はゐませんが、邦人(はうじん)がボツ／＼商賣(しょうばい)を始めました。誰れが買ふのかハンドバツク等(たうとう)が飾つてありました。

傷痍軍人成功美談

闇の中やみ なかの光ひかり

|| 宗教的信念をもつて成功した藤本財吉氏 ||

一

藤本財吉は納屋に坐つたまゝ、何時までも暗い想をたどつてゐるのだつた。

「もう俺も三十二だ。眼さへ見えれば立派に一人前の男として立つてゆけるのに——」

藤本さんは大孤山の戦場に兩眼を敵弾に射抜かれた香川縣出身の傷痍軍人だ。既に三年

もの長い間家の中で寝ついたきりであつた。

貧しい農家で、兄一人で營々と働いてゐるのに、傷病者とは云へ、若い自分が寝たきりで

何に一つ手傳ひも出来ないと言ふのは心苦し

い極みである。

失明の苦惱と家人への氣がね、それは彼を

いたく憂鬱にした。近頃やつと起きあがれる

やうになつて、不自由を忍んで襖細工の手傳

ひなどをし始めたが、盲人の手探り仕事位で

なんの家計のたしにならう。恩給の百三十七

圓三十錢は貧しい一家の助けにはなると云つ

ても、それで生活の安定が得られる筈は勿論

ない。

「盲目でも、どうにか獨立し、母親を安堵さ

せてやり度い。」

さう思ふのだけれ共、さて不具者がどうす

れば、世の中を渡つてゆけるであらうか。

彼はから考へて來て、たゞいら／＼と獨り悶えるばかりであつた。

と訪ふ人聲が聞えて來た。

彼は夢から醒めたやうに立上つた。

「誰方です？」

「私ぢやよ。財吉さんお精が出るなう。」

にこやかに話しかけつゝ、近づいて來たのは何時も暇を見ては立寄つて、彼に親切に慰

めの言葉をかけてくれるこの村の村長であつ

た。

二

「實は、財吉さん。あんたから度々相談をう

けるので、私も色々と研究して居つたんぢや

が、これならばあんたに適するだらうと思は

れる職業を考へついたものぢやから、早速や

つて來ましたよ。」

「えッ！ それはなんです。どんな仕事です

か？」

彼は膝をのり出した。

「それはな、此處らではあんまりやつてをら

んが、マツサージぢやよ。」



「マツサージ? つまり鍼灸師ですね」

「いや、一口に鍼灸師と云ふとなんだが、今都會ではマツサージ師と云つて、とても流行つてゐるさうぢや。勿論鍼灸も一途にやるのぢやらうが、マツサージの方は機械を使つて文化的で品がいゝし、覺えるのもさう骨は折れないと云ふ話だ。それで充分暮しは立つて

ゆくさうぢやから、ひとつ奮發してやつて見なさんか。その氣があつたら、私が高松の盲啞學校から規則書を取寄せて、とくと研究して上げやう。」

しかし、彼は黙つて考へこんでしまつた。

鍼灸にしてもマツサージにしても、どうせ人の情に縋つて僅かの金を稼ぐいはゞ乞食商賣に類したものではないか、いくら盲目になつても未だそこ迄落ぶれたくない——と世間を知らぬ彼の一徹な勝氣が村長の折角の言葉も快く受入れないのである。村長は少し不本意さうに黙つて行つた。

しかし、彼の煮えきらぬ態度にこりず、人の好い村長はその後もしきりに、この職業をすゝめに来るのだつた。

その親切な熱心に彼の心もいつしか動いて來た。母親や兄に相談すると、それはお前の心ま

かせたと云ふ。

——よし何時までも職業にこだはつてゐても仕方はない。又考へて見れば、どんな下賤に見える商賣でも、額に汗して報酬を得る以上それは神聖な勞働と云はねばならぬ。やう。男らしく全力を盡してやらう。

彼はつひに決心した。そして高松の盲啞學校専修科に入學することになつた。

それから彼の勉強ぶりは物凄かつた。彼はかつて帝國軍人として戰場にのぞんだ時の勇猛心を勉學の世界にふり向けたのだつた。そして困難な點字も忽ちに覚えこみ、鍼灸、マツサージを習得して、三年ののちには首尾よく開業の資格を獲得した。

その後のことは彼の偽らざる言葉を記述した方が、簡單にして印象深い。彼は靜かに過去を振返つて云ふ、

「始めの内は辛ひ思ひもしました。併し自分の腕で獨立して生活する悦びはまた格別でした。世間の人達も決して冷たいものではなく、暖い心をもつて接してくれたので、急

に今までの無明の間が露れて、人生が明るくなつたやうな気がしました。そして私が唯ありきたりの概念でこの職業を賤しいものゝやうに考へてゐたのも全くの間違ひであることが解りました。斯くして私はしばらく大阪で開業してゐましたが、間もなく現在の土地にうつり、以來順調に今日に至つてゐます。今では恩給もずつと増し、努力の甲斐あつて相當の収入を擧げて來ましたので、最近二、三

御法語 念佛

念佛の行は、本より行住座臥時處諸縁をえらばず、身口の不淨をもきはぬ行にて候へば易行往生とは申候也。但其中にも心をきよくして申すをば第一の行と申候也。只淨土を心にかくれば心淨の行法にて候也。人をもかやうに御すゝめ候べし。さやうに常に申させ給はんをば、とかく申べき様候はず、我身も知るべくて、此度往生すべしとおぼし候べし。ゆめく此心能々つよくならせ給ふべし。(法然上人法語抄一一三)

年にわたる病臥生活にも耐なく耐えることが出来、どりやら暮しに困らない程度の貯へをもつて一家四人明るい家庭を楽しんでゐるのです」

三

香川県大川郡引田町の藤本財吉氏は、かうして、自ら不具の身に鞭打ち、輝かしい更生の生活を樹立した。

しかし、こゝに至るまでには彼の内部生活に敬虔な努力が費されてゐることを見逃してはならない。彼は己れの悲痛な體驗に省みて同じ苦しみに喘ぐ人々に向つて、宗教心把握の必要なることを聲を大にして叫びかけてゐる。

「人生の第一義は自己完成にあります。即ち人間の終局目的は自分自身を完成するにあると固く信じてそれに向つて努力精進するのです。だが單なる精進では中々吾々よわい人間には困難であるから、そこで宗教の力を借りて念佛生活に入るのです。念佛とは何であるか、即ちこゝに如來様と云ふ至大、至善、至

美の圓滿具徳の靈極者の存在を信じ、而して如來様は常に吾々の眞正面におられて、我らを救はんと念じ、吾々が心から南無阿彌陀佛と如來の御名を叫ぶのを待ち侘びておられるのである。と云ふことを固く信じて疑はず、阿彌陀たすけたまへと一心に南無阿彌陀佛々々々々々と唱へるのであります。かくして行住座臥、一心に念佛してゐる中には何時かは心の眼が開き、何とも形容し難い喜悅が湧いて來て、不平も不懺も僻みも咒ひも、苦惱も消えうせて、そこにはただ感謝の念のみが生れます。この光明歡喜の世界こそ宗教の絶對境であると共に、又人間を一步く向上させ社會國家を正しく明るんするものであります。私は人間生活の安住地はこゝにあると信じて疑ひません。」

理窟や文句をゆるさぬ崇嚴な宗教生活を己れの身に體得し、この平和と歡喜を人にわかたんとするに至るまでには、何人も及びがたい克己、忍耐の尊い内省苦行が續けられたことであらう。

信仰相談 中村辨康

實生活の散心と念佛の専念

問

實生活には多くの配慮を要します。随つて散心でなくては生活が出来ません。然るに念佛は一向専念でなくてはならぬと申しますが、この散心的な實生活になぜ専念的な念佛が必要なのでせうか。御教示下さい。(山口・柳井・一青年)

答

宗教的に云ふと「生活」は「念佛」の爲にのみ與へられたもので、生活の爲に「念佛」が必要なのではありません。私達は六道を輪廻して居て何時までたつても此の苦の世界から抜け出ることが出来ませんのですが、此の度始めて佛教に遇ひ然かも淨土の御法に遇ふことが出来て、如來様の御力に依て茲に此の生死の苦海を渡り得る保證を與へられたことは誠に此上もない有り難

いことで、本當に嬉しい限りと言はねばなりません。だから法然上人も「念佛の申されるやうに此の世を過ぐべき」やうに勧められて居ります。生活の一切は「念佛」の助けであつて「念佛」の申されない生活様式は之を「念佛」の申されるやうに改むべきことを申され、若し「念佛」の防げとなるならば之を排除すべしと云ふのです。一々に實生活と云ひますが「念佛生活」以外は本當の「實生活」ではないのです。即ち念佛生活以外は畢竟六道輪廻の迷ひの生活に過ぎず、何時までもグルグル廻りをして居る「むだごと、えらごと」に過ぎないからです。だから生活の中心は「念佛」であつて念佛が生活の助けではありません。衣食住は念佛申さんが爲の衣食住で

す。

とは云ふものの「念佛」が私達の衣食住をよりよくすることも事實です。

成る程「念佛」は一意専心如來を南無することにあります。一以て貫いて行く決意が必要で、ところが普通世間の事をするにしても此の一以て貫いて行く「専心」の必要なことは申すまでもありません。あれこれと目的を多岐に分けては何事も成功しません。誠心を以て貫いて行かなくては畢竟ぐうたらべいに終つてしまひます。然し私達は一を操守して行くことに退縮を感じやすいです。ことに「念佛」のやうな單純なことには中々専心が出来ないのです。餘程の強い求道心願心がなくては出来ないのです。ですから念佛に専心することの出来る人は何事にも専心して行くことにしても必ず或る程度の成果をあげ得る人です。平生生活の散心の中にも一以て貫いて行ける人は仕合せです。私達は散心でも貫いて行けるものです。例へば「我」と云ふこと

は如何に心が散つて居ても忘れることはあり
ません。念佛の信仰ではこの「我」と「念佛」
とを結び付けて我が何時でも忘られて居ない
やうに「念佛」を忘れないやうにするのが本
當です。また戀と云ふやうな精神状態が何時
も相手を忘れられないやうに如來様を欣慕す
る心が忘られないのが信仰です。

佛教に云ふ殺生とは

かうした念佛の専心状態が散心の生活に役
立つことを目的とするものではないけれども
自然役立つて居ることは非常に大きいです。
そして私達には散心と云つても専念し得る可
能性があり上つ生活が散心なればこそ尙ほ更
ら専心することの必要をさへ感ずるもので
す。

(問)

私信で御願ひしたところ早速御返
信を頂き厚く御禮申し上げます。

偕て御手紙によりもう少し問題の中核に觸れ
させて戴きたいと思ひ再び御時ね申し上げま
す。

第一、人間は生れ落ちた時から、もう親の身
體又その親と、他動物を殺し食ひして居る
のではないでせうか。つまり先祖代々生れ
た時から罪を負つて居るのであると思はれ
ます。

第二、礦物には生命がないと思ひます。隨

て礦物を破砕したとて殺生ではなく、情物
を殺して初めて殺生であらうと思ひます。

第三、宗教と科學と兩立するや否やと云ふ大
問題ですが、古は僧侶など禁肉生活をさ

れた人も多かつたのに、科學の進歩と共に

段々肉食者が殖えて來て謂ゆる末世となつ

て佛の教が愈々頹れて行くのではありません

まいか。かくの如く科學が進めば宗教は衰

へるとすると、科學の方が宗教よりも大き

なものとなつてくると思ひます。

宗教が一切を包容する丈の力を持ち世界を

リードするものでなかつたら、畢竟古代の
遺物に過ぎないと思ひます。私は宗教が一
切の原動力となり指導體となるのを希望し
ます。

この處をもう少し分り易く御説明御指導願
ひます。またもう一つ

第四、我々は何故動物などを殺す罪を重く見
植物など殺す罪を軽く見るのでせうか。

是も御願ひいたします。

(山口・熊毛・文正生)

(答)

(第一) 人間に限つたことでは
ありません。一切のものは互ひに

殺し合ひ食ひ合つて居るのです。それは欲界

に生を受けて居るからであり、それなくして

は生きて行けないからです。だから無論罪を

作りつゝある譯でもあります。然し先祖の身

親の身になつて見れば自分達を子孫に類ち與

へたのであつて、其の代りとしては子孫がよ

りよくなつて呉れることを要求して居るので

す。だからこちらとしては其報恩行として自
分の向上を完全に爲し遂げればその罪は先づ

先づ許されてよいのではありますまいか。更には自分の身を子孫に頌ち與へてよりよき子孫を作り、一方社會國家にも奉仕して社會國家の恩に報じて行くのです。然るにそれをして利己一點張りで慾の皮ばかりつつばらして居るから、あたらし頌ち與へられた多くの命を無駄死にさせた事になり罪にもなるのです。

(第二) 鐵物に生命がないと思ふのは一般常識であつて、それに對して敢へて異論を申さうと云ふ譯ではありませんけれども、私達

の生命に對する觀念は本當の理解ではなく、生物體の持續をのみ「生命」と考へて居る爲

に、其處に色々な誤想を起して居ます。それが凡夫の凡夫たるところである譯でせう。

私達は自分達と同じやうに感情を持つものを殺すのを「殺生」と云つて居ますが、元來「生命」とは其者に分け與へられたる「時間」なのですから、一切のものは皆な「時間」を持つて居る意味に於て「生命」ありと考へて差支へないのです。然し劣等のもの程、分割さ

れた小部分にも生命が分布されそして持續されて行きます。例へばラツバ虫が幾つかに切断されても間もなく獨立した完全虫となるやうに、條虫が千切られて一關節だけになつてもやがて頭部が出來て一個の獨立體となるやうなものです。植物でも挿し木されて獨立し得られ、礦物も細かくされつゝも獨立し得られます。そしてその場合私達は喜びこそすれ悲しみはしません。それはそれに對して私達の感情が悲しむべき原因を見出し得ないからです。

けれどもそれが無意味になつた場合、無價値になつた場合、例へば寶石を粉にして海の中へ吹き飛ばしたと云ふやうな場合、ダイヤモンドを火にくべてしまつた場合など、悲しくなるではありませんか。それは慈が手傳つて居るからとも云へませう。然し無價値になつたその事が本當の悲しみでなくてはなりません。だから本當の殺生は礦物植物は勿論自らの時間を空費したことさへも大きな「殺生」の一つに數へてよいと思ひます。

(第三)

宗教は決して科學に對立して居るものではありません。科學は私達の生活に利用されるもので、謂はゞ生活の參考資料に過ぎないものです。しかも科學は自然科學にしる精神科學にしる、推移して行く一現象の或瞬間の一狀態を捉らへ、其點についてののみ研究して行くものですから、まだまだ發達の過程にあるもので、未完成のもので、古來西洋の徹底せる科學者は皆な宗教に歸せざるを得なかつたのでした。生半可の科學信者のみが宗教否定をやつたり宗教輕視をして居るのです。貴氏は科學が發達して宗教が衰へたので肉食者が殖へたかのやうに云はれますが、そんな事はありません。未開時代には他動物とは互ひに食いつ食はれつして居たもので、野蠻人にはまだ人肉に舌鼓をうつものさへあるではありませんか。弱肉強食は科學以前に於てもあつたのです。文化が進んで色々形を替へては居るけれども、此の有様は科學以前も科學以後も變化しては居ないと思ひます。然しそれは楯の半面であつてもう一

つの半面には「相互扶助」の事實もありま
す。相互扶助は同種同族の間に行はれる「生
かし合ひ」です。之が發達したのが社會道德
なのであり、また高等宗教の一面をもなすも
のです。

宗教は決して科學と對立するものではあり
ません。科學を包容して居るものです。こと
に佛教は科學を否定しません。止揚すること
はあつても科學と對立することはありませ
ん。だからいくら科學が發達しても、佛教の
原理はそれが爲めにちつともくつがへされた
ことはありません。

貴氏は佛教の「戒律」的方面をのみ見て、
禁肉者が増加したから科學に方て佛教がくづ
れて來たと云はれますが、元來「禁肉」は印
度の風土から來たもので、暑い國では寒い國
の人程禁肉を苦痛としません。其上印度は非
常に生物を愛護する風習を持つて居りますか
ら、その愛憐の情を疵付けるやうな「生物を
殺す」ことを厭ひ、肉を喰ふことに依て愛憐
の情を薄からしむることがないやうに心掛け

たのです。その風習が佛教の教律論三藏の傳
來と共に日本へも將來されて來たもので、我
國の風土に合はないから、一部の人のみの嚴
守で一般には行はれなかつたのもありま
す。平安朝時代の僧侶で素齋肉食して居た人
は有名人の中にも相當にあつたのでした。そ
れが徳川時代になつて宗教制度が出來た時、
僧侶の肉食素齋が公的に禁ぜられた譯です。

然し元來風土上健康に合はない禁止であり、
肉體存続上の榮養に關すること、身體の要
求からそれを犯すものも相當に多かつたやう
です。また肉食は釋尊時代には支那佛教や日
本佛教のやうにやかましくは云はれませんが
した。唯だ「三種の不淨肉」のみが禁ぜられ
て居たのです。だから科學が進歩して佛の教
が頽れたのではなく、色々な社會事情や時代
思潮がさうさせたのです。

佛教は人々に「めざめ」を要求するもので
す。一切の人間を正しきへと導く指導原理で
す。昔しの遺物ではなく常に新らしく人類の
精神開發につとめて居るものです。然しそれ

は利己主義の根強い感情や欲情を悔ひ改めさ
せなくてはならないものですから、非常に困
難な大教育事業であつて、容易の事では多數
の人が付いて來ないのです。釋尊時代でさへ
舍衛城と云ふ町の中の人達の三分の一だけし
か、お話をきかなかつたさうです。五十年の
間一日として休むことなき努力的傳道の結果
が、直接の御弟子としては僅かに千二百五十
人しかなかつたのを見ても思ひ、半ばに過ぎ
ぬものがありませう。然るに世が進むに隨つ
て佛教は四隣に廣まり印度のうしろの國々や
西藏、支那、ビルマ、安南、南洋、朝鮮、日
本、更には遠く西洋流の基督教などへも大き
な影響を與へて居り、今日ではスイス、ドイ
ツ、イギリス等にも佛教學者は勿論出家僧を
も出すに至つて居ます。

宗教は生活です。科學のやうな生活の參考
ではありません。生活態度を一變させるもの
です。だからむづかしいです。煩惱生活助長
のインチキ宗教は流行するかも知れませんが
正しい宗教は人々の生活革命を要求するもの

ですから、一般人の耳に入らないのは當り前です。然し佛教の如きは科學の發達に依て益益光輝を放つべきものです。大谷光瑞伯の如きは「佛教は科學なり」とも云つて居る位です。其説の如何は別としても科學の爲に壓へつけられ衰へさせられることはありません。少年教化の爲の「本生譚」だとか其他の譬喩談がかなり非現實的であるからと云つて、佛教の原理までを否定する材料にすることは出来ません。また末法思想の如きも果して釋尊の眞説か何うか、阿彌陀經には釋尊自らその當時の時代を「五濁惡世」と云つて居ります。

淨き友 信仰坐談會案内

一、日時

来る十一月 十二日(第二日曜) 午後七時

一、場所

東京市本郷區(白山上) 東片町七八美容大學院橋本方

一、講師

中村辨康先生

一、題目

御法語「登山狀」

淨き友の會

す。信仰に目覺めざる限り世は何時でも「末法時」であつて、覺めたる者には何時でも「正法時」であり、信仰を概念的に取扱つて居る人達には何時でも「像法時」なのです。

(第四) 動物は人間に近いから其殺生を重く見るのであり、植物は生長も緩慢であり感情が現はれないから輕く見て居るだけであつて、それも正しい「生命觀」が人々に理解されて居ないからです。つまり凡夫であるからです。

S.S.S.

金はンベ金
亂賣にンベ金
優にンベ金
サエンス合金

！を



¥150以上

筆年萬合金・スエンス ★



「願」の宗教

—— 日常勤行式解説 ——

中 村 辨 康

(二四) 總願偈

(一切の人々の爲に、我をもよりよくし、また人々と共に眞實に生きたいと願ひて)

自他法界利益を同じくし、共に極樂に生じて佛道を成ぜん。

衆生無邊誓願度
法門無盡誓願知
自他法界同利益

煩惱無邊誓願斷
無上菩提誓願證
共生極樂成佛道

(前の四句は金光明經、心地觀經、往生要集、止觀大意等に出で後の二句は善導大師法事讃に出づ)

衆生は無邊なり
煩惱は無邊なり
法門は無盡なり
無上の菩提なり

度せんことを誓願す、
斷ぜんことを誓願す、
知らんことを誓願す、
證せんことを誓願す、

(意 譯)

世界は無邊でありますから、其無邊なる世界に住んで居る生ける者もまた無量無邊で數へ盡されない筈であります。併し乍ら私は今その無量無邊なる衆生の生ける者をして悉く生死の苦海を渡りさとの彼岸に到らしめたいと誓願致します。

それが爲には先づ自分を本物にすべく、煩惱を斷し法門を學び菩提を證得しなければなりません。

煩惱は私達の心行が千差萬別して色々に働きますから亦た無量無邊であります。然し之等を斷しなければ、衆生済度の大誓願

を完成することが出来ません。私は今その煩惱を斷盡したいと誓願致します。

また法門は「道に入る通路で」是非共必要であります。しかも眞理は互ひに主件具足して盡くるところがありません。然し之を學びつくし之を知り盡さなければ衆生を濟度することが出来ませんからそれを學ばんことを誓願致します。

また菩提は「無上道」であつて上の無い無限の道であります。然しその無限の道を何處までも進んで實際實證して行かなければ衆生を救済することが出来ません。だから之の證得を誓願致します。

是等四つの誓願と及び其誓願に伴ふ行爲との功德を、自分の上にも他の一切の人々の上にも廻向して利益を均しく受け、共に淨土に往き生れて、此四大誓願を完成し以て佛道を成就したいものであります。

講 讀

私達は初めには自分の信仰のことに熱中して他を顧る暇もなかつたが、總廻向の偈を唱へるに及んで、初めて信仰生活として営まれる限り他と共になすべきものであることを痛感し、寧ろ進んで我が受くべき功德を我身に受けず、他の多くの人々の方に振り向け、如來様の御子として自覺に奮ひ立ち、幾分なりとも

如來様のお仕事のお手傳ひをさせて頂くべく心懸けるに到つたのである。

如來様の大悲は天地廻るところに充ち満みて居るけれども、最も強く明らかに現はれ得るのは私達人間を通すときである。私達の心の受信機は如來様の大悲を受信するばかりでなく、これをまた有縁の人々へ傳達する發信の役目をも持つて居る。受けたら受けつ放しと云ふことは決してないのである。

此受信から来る發信は信仰上の自然の發露であつて、それに激淺強弱の差別はあつても信仰に入つて居る者には此作用は必ず付きものである。そして是れこそ聖道門に云ふところの「上求菩提下化衆生」にあたるものでもある。また「上求菩提下化衆生」は菩薩の上行で、上、菩提を求むるのも、實は下、衆生を度せんが爲であるのだから、今の「總廻向」即ち「四弘誓願」に於ても、初めの「度衆生願」の爲に、あとの「斷煩惱願」も「知法門願」も「證菩提願」も必要されるのである。



即ち根本的なものは社會的な願望であらねばならないからである。

然し乍ら「度衆生」と云ふことは非常にむづかしいことで、中

仲自分の思ふやうには行かない。入地以上の菩薩でないと「説法自在」にならぬとさへ云はれて居るが、おはなしには上手下手があつて話術に工な人は聴衆への感銘を深からしめ効果を相當あげては居る。然し單に話術が工であると云ふだけでは中々聴衆の求道心を奮起せしめ得ると云ふ譯には行かない。何うしても身業説法意業説法が伴はなくてはならないものである。

「身業説法」は日常起居の上に不斷に現はれるものであり、「意業説法」は熾烈な求道心を所有して居る者の上に現はれる一種の氣魄であり迫力である。だから淨土門と雖も此四弘誓願的な氣持が強く起きて居なければならぬのである。

大體佛道修行に於ては三つの障を克服しなければならぬとして居る。即ち

煩惱障——見思惑——煩惱無邊

所知障——塵沙惑——法門無盡

根本障——無明惑——無上菩提

煩惱障は見惑と思惑で、見惑とは見解の惑、思想上の惑である。謂ゆる顛倒の見を以て人生を處理せんとするものである。また思惑とは本能的な迷ひである。自分を保存する爲に或程度まで必要な欲望ではあるが、それが度を越すところに迷惑を生ずるのであり、そして前の見惑をも助長せしめるものである。

然し見惑の方は思想的な惑であるから、理解さへ出来れば割合

に容易に改めることが出来る。だが思惑の方は中々さう簡單に行かないのであつて非常に執念深いものである。理窟は判つても實行が容易に伴はない。惡習慣は取れにくいものだからである。

だから佛師が丸太を一撃一撃彫り起して佛像を作り出すやうに、私達も私達の一撃手一投足を改善してだんだんと菩提を成就するやうにに向けて行かなければならないのである。そして段々に障りを取り除いて行くことに努めるのである。

更には多くの人々を度する爲に色々の事を知つて居なければ時差支へることがある。知らない事が多ければ多い程教へを受ける人達は信用しない。信用されなければ教化は出来ない。然るに私達は存外何にも知つて居ないのである。随分些細なつまらないことまでも知らないのである。それは恰度塵や砂が數限りもなく其數量に際限がないやうに、私達もまた知らないことだらけなのである。だから「塵沙の惑」と名づけて居るのである。また優によく知つて居るにしても私達のは皮想の觀の方が多く、事物の眞相を正確に擲むことが出来ないで、誤つた觀察を下し勝なのである。自惚れるのは人間の常だけれども、よくよく反省して見ると事物の眞相を見る眼に無量無數の障があることを知るであらう。依故なく偏執なく公平無私にあらゆる觀點から眺め得たものを綜合してそれに正しい斷案を下すことは、相當の經驗と力量とを要する譯で、中々一朝一夕のことには行かないものである。

然し之等の煩惱障所知障も畢竟は根本的な障が除かれてゐないからである。即ち「無明」と云ふ根本煩惱があるからである。「無明」とは讀んで字の通り人生に對する「不明」で、人生の眞意義眞目的に覺めないことそのことを指して居るのである。この「無明」の反對は「覺明」であり「正覺」である。「覺明」が長夜の眠りの中にねむらされて、呼べども起きず、起せども醒めない姿が「無明」である。

私達は醒めさうなものだが中々容易に覺めない。こげつきがこびりついて居て何うしても取れないのである。恰度墨のついたハシケチを洗ふやうなもので、黒い墨色はすぐ取れてもそのあとの墨色はなか／＼落ちないものであるが、それを根氣よく度々手數をかけて洗へば大體白くなつたやうには見へるけれども、顯微鏡のやうな精密な擴大鏡で覗くと墨の分子がまだ／＼澤山付いて居るのである。そしてそれは洗つても洗つても中々落ちないものである。力一杯に強く洗へば布そのものが切れて大なしになつて元子を失つてしまふであらうから無茶苦茶なことも出来ない。このやうに根本の「無明」は中々根強いものである。

この煩惱障と所知障とを除き更に根本の無明を覺醒せしむれば、遂に涅槃を得て佛道を成就し、隨て目的とする衆生濟度も心の欲するまゝに自由自在に出来るのである。然しこれは聖道門に云ふところのもので、寔にこれ容易の事ではない。然るに我が

淨土門は元と元と一般人の爲に説かれたものであるから、かうした難な道を強いるものではないとも云ひ得る筈である。

然し乍ら之は元來「誓願」であつて淨土に往生してから完成である。けれどもこの淨土への往生を望む所以も、畢竟は自分の佛格を完成して一切の人々の爲に盡さうとする廻向發願心の下に發したのである。だから即効を要求するものではないが、少くとも今私達が如來様の子として出来るだけ如來様の御仕事の萬分の一を爲さうと心掛ける以上、やはり一かどの菩薩心即ち四弘誓願があつてもよいのではあるまいか。

さればこそ其誓願を今世に於て完全に果さうとするのではない。極樂に往生して其淨き環境の中によき先輩よき友達と共に、互にはげまし勵まされつゝ一日も早く佛道を完成したいと思ふのである。

此故にせめては此の誓願に依て全法界共に利益を同らせんとするもので、自らを高く置かず和かな豊かな氣持の中に、如來様の被護念を仰いで居る譯である。

凡ては如來様の御力である。一切合切如來慈光の中に生かされて居るのである。如來様のお慈悲なしには生きて行かれないのである。

けれども兎もすればそれを忘れそれに背き自分だけの勝手氣儘を發揮しやうとして、煩惱の泥海の中に溺れ、或は法を學ぶこと

の面倒臭さに徒らなる無爲を要求し、或は不斷に覺醒することの窮屈さにかりそめの苟安を望むのが私達の常である。

如來様から離れたがる私達の心事の陋劣なる、誠に我ながらあきれざるを得ないものがある。だからせめては朝な夕なに此偈文を稱へて佛子たるの責任を呼びさまし、菩薩の志願の深宏なるに思ひを凝しつゝ、淨土の御法の有り難さに感泣すべきではなからうか。

また今更に願みて想へば此「日常勤行式」は「願」に依て貫ぬかれて居るやうである。

香偈の「願我身淨、願我心如」開經偈の「願解如來眞實義」禮讚各節の「願共諸衆生」總廻向偈の「願以此功德」此の總願偈の四誓願、それからこのあとに出て来る三歸禮の「願共諸衆生回願往生無量壽國」や最後の送佛偈の「願佛慈心遙護念」など初めから終りまで「願」で一貫されて居る。

淨土教は全く「願の宗教」である。即ち如來の本願に依て出来上つて居るからである。如來の本願なくしては淨土教は成立しないからである。そして此本願に應同するものが私達の信でもある。出發する最初は謂ゆる求道時代で「確信」を得んとする願望でしかないが、一度信を得て見ると、人生五十年の生涯は自己を改造し自己を完成せんとする貴重なる絶好の機會と時間として與へたも

のであることに氣が付くのである。然も之は何うして自分一人だけでは出来ない。兎もすれば周圍に引きづられて行くのが自分であるから、周圍と共に進まねば自分を進ましめ得ないことにも氣がつく。そこで先以て同信の仲間を作ることに努力しはじめ。即ち「度衆生願」が起るのである。之は感情的にも自分の喜びを他へ願けやうとする氣持が當然に働く譯で、一人でも多くの共鳴者が出来ればそれだけ自分の喜びも増大して来る。前の意志的な願望から来る自己改善とそれに依て導かれた周圍改善への願ひとこの感情的な喜びを願ひ合ひ喜びを擴大したいと望む願ひとは兩相待つて「願共諸衆生往生安樂國心」を強めることになる。しかも其願望を實現すべく出来るだけ佛教を學び心操を堅實にして以て自らの信慧をも増上せしめやうと志すことにもなる。

かくの如く私達の「願」は聖道門の「願」と違つて如來の大悲本願に依つて起さしめられたものであり、如來の本願なくしては起き得ないものである。だから如來の本願を基礎として初めて發現し得るものである。

また之と同時に如來の本願も私達の願心を経て始めて具體化されるものであるから私達の願心が増上すれば如來様も屹度喜んで下さるに相違ない。之れは恰度親の慈悲が子を待つて初めて表面化し、子供はまた親の慈愛に依ていよく／＼孝心を強くするのと同様であつて、全く法爾自然の道理に外ならないのである。

る。

此故に淨土教こそは「父子愛の宗教」と云つてもよい。即ち「父子相迎」の宗教なのである。大原問答の中には

「人をして欣慕せしむるの教門」

と云ひ「信」そのものを「欣ひ慕ふ」と説明して居るが、その父子相迎の愛の中に

「自然悟道の密意は極めて是れ深奥なり」

と、自然に道を悟らしむることを示されて居る。是れ兩方の「願」が互に相牽引するところに「信」が成立ち「聖愛」が成立つと共にそれに依つてこちらも亦引き立てられるのである。だから單に「神は愛なり神は力なり」と云ふのではなく「願」の上に現はれる慈悲と、「願」の心の働く「増上緣力」とが特別な形を作らしめて「信仰」と云ふ宗教的な心とならしめて居るのである。

是れ極めて自然のもので、子が親を慕ひ、親が子をいつくしむることが自然なものと同様である。

然るに之を「難信の法」と云つて居るのは、畢竟こちらに「願」がないからである。「願」が起らないからである。否、願が起り難いからである。物質的な眼の先の「願」のみに捉はれて「永遠の望み」に眼が開かないからである。

然し私達は此「日常勤行式」を行ひ、之を味ふことに依てこの起しがたい「願心」を起し、發し難い「道心」が起つたのである

から、本當に有り難い極みで、後から人間に生れて來た甲斐を嬉しく感ぜざるを得ないのである。

法然上人の御弟子の一人である「空阿彌陀佛」は常に

「あゝ西方極樂世界よ」

と云つて涙を流して喜んで居たさうであるが、私達も亦た此の「願」の宗教に遇ひ得たことを喜ぶと共に、四弘誓願を起して他の大勢の人々と共に喜びを踴り合ひたいものである。

字 解

衆生——他の多數のものと共に生きて居る者のこと

無邊——其住む處が無邊であるから、そこに住んで居る者も無邊であると云ふこと。

誓願——自ら心を制するのを「誓」と云ひその完成を志し求むるを「願」と云ふ

度——渡ること。生死を海に譬へて、その海を渡つて涅槃の岸に到ること。

煩惱——人々の身と心とを煩はし惱ますことを相續せしむるもののこと。

其最も重なるものは「六大煩惱」であり、之れに附隨したものゝを「隨煩惱」と云ふ。

貪、瞋、痴、慢、疑及び邪見——六大煩惱。

編輯後記

◆歐洲の大戦はいよいよ本格的になりさうである。この大戦をもつて神風であるなぞと思つてゐる人間がまだ相當にあるのには驚く日本には神風が屢々吹いてゐる、しかしそれには神風を神風たらしめる國民總力の確固たる結合があつたからである。

◆この大戦を對岸の火の如く眺めてはゐられない理由は日常の生活の中にも澤山の例證として轉つてゐる。更に力強い國民的結合の要求せられる秋、その底力を養ふ信仰への精進をゆるがせにしてはならない。

◆本誌の巻頭は久し振りに増上寺法主大島大僧正にお願申上た和田正系博士の「病弱の婦人に答へて」と共も一般人の信仰に對す

る心構、日常の生活態度と信仰との關係を甚だ興味ある實例をもつて説かれたもので、熟讀玩味すべき文章と思ひます。

◆佐藤賢順師の「勝尾寺に詣す」は元祖上人の御遺跡の巡拜記としてこれも是非共讀んで頂き度いものであります。

◆吉田絃二郎先生の「阪根翁のこと」は多くの讀者から禮讃の言葉を浴せられいづれも「近來まれに見る妙好人傳」なりとされてゐます。

◆また本編輯部の東慈道君が南支戦線における自己の體驗を、「野戦病院日記抄」として發表しました。いままであまり書かれてないこの方面の記述として異色あるものと信じます。

◆更に北林透馬氏の論説、本宗の新進布教家金田明進師の信仰實話等一般のジャーナリズムに追いつかず獨特の讀物を揃へてゐます。

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

◆會員で御住所御變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年十月三日印刷納本
昭和四年十二月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷出來)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ポルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース装)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田枝二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳園園著

(增刷出來)

我が信仰

(四六版總ルビ付)

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十四年十月廿日印刷納本 昭和十四年十一月一日發行

淨

土 第五卷 第十一號

定價金十二錢 (送料五厘)
郵費等金十三錢
外地定價